シンポジウム

よみがえる篠本城跡

――戦国動乱期城郭の謎にせまる――

（篠本城に見る房総の中世）

1995

財団法人 東総文化財センター
光 町 教 育 委 員 会

シンポジウムプログラム

日　時　　平成７年10月14日（土）・15日（日）

会　場　　光町民会館　大ホール

主　催　　財団法人　東総文化財センター
　　光　町　教　育　委　員　会

日　程　　14日　午後１時　　受付開始
　　１時半　　開会あいさつ
　　２時　　発表１　基調報告　篠本城跡の発掘調査成果　　道澤　明
　　３時　　発表２　中世篠本郷の武士と村落
　　文献・史料から見た篠本城周辺　　伊藤一男
　　４時　　発表３　篠本城の焼物が語ること　　小野正敏
　　５時　　１日目発表終了　篠本城跡出土遺物見学
　　６時　　懇親会
　　８時　　懇親会終了

　　15日　午前９時　　発表４　東総の中世城郭　　椎名幸一
　　10時　　発表５　考古学からみた房総の中世城館の構造　　柴田龍司
　　10時55分　休憩
　　11時05分　発表６　篠本城跡の仏教遺物　　橋浦芳朗
　　12時　　昼食
　　午後１時　　全体討論
　　（後半に会場からの質問受付）
　　３時　　討論収束、閉会

目　次

シンポジウムプログラム

シンポジウム開催にあたって …… 1

篠本城跡の調査成果
道澤　明 …… 3

中世篠本郷の武士と村落
伊藤一男 …… 25

篠本城の焼物が語ること
小野正敏 …… 41

東総の中世城郭
椎名幸一 …… 51

考古学からみた房総の中世城館の構造
柴田龍司 …… 69

篠本城跡出土の仏教遺物
橋浦芳朗 …… 79

栗山川水系の中世城館跡について
遠山誠一 …… 81

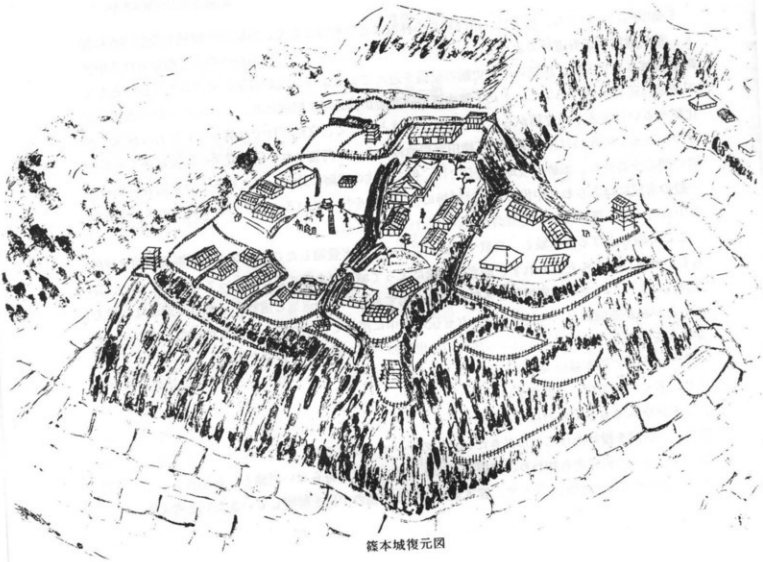
シンポジウム開催にあたって

これまで中世史の研究と言えば、文献の分析が主であった。しかし、近年における埋蔵文化財の発掘調査の拡大は、中世から近世にまでその対象範囲が及び、考古学からのアプローチによる中・近世の研究が盛んになって来た。中でも城郭研究では、これまで発掘調査にはよらない地表面調査によって、その形状や構造が分析されて来たが、発掘調査は地表面観察では計り知れないさまざまなことがわかってきた。また、発掘調査は文献に書かれていたことに、物的な検証を与えることもできた。

千葉県内においても、笹子城、田向城や小林城などを初めとして、城跡の大規模な発掘調査に加え、荒久遺跡や芝野遺跡のような中世村落遺跡、山谷遺跡のような街道沿いの市と推定される中世町屋遺跡も発見され、房総の中世史観の転機を迎えているような観がある。その新たな動きとして千葉城郭研究会が1985年に、また千葉中近世研究会が1995年に結成され、どちらかというと埋蔵文化財あるいは考古学の立場からによる研究が主体となって、文献だけでは解らない新たな成果をあげつつある。昨年には袖ケ浦市で「横田郷現地報告会」が開催され、研究成果の発表は多くの参加者の関心を寄せた。城跡の現地説明会では、他の時代の遺跡に比較してより多くの参加者を集め、一般の市民にはとりわけ中世あるいは城跡に強い興味を持っていることがわかる。そのような状況の中にあって、篠本城跡の発掘調査が進められたのである。

ここで取り上げる篠本城も、文献や歴史上にはほとんど登場したことはなく、発掘調査前は城跡らしい痕跡はほとんど見られず、地名と伝承によって城跡であることがわかっていた。しかし、発掘調査によって複雑な城郭構造と多数の遺物が出てきた。この遺構と遺物からある時期かなり栄えたことがわかる城跡が、なぜほろび、なぜ伝承の中に消えて行ったのかを探るために、このシンポジウムを企画した。そしてこれから房総の中世史の一端を解明できればと思う。

また、昨年の篠本城跡現地説明会では、多くの一般市民はじめ中世史あるいは城郭研究者が参加され、多くのご意見やご助言をいただいたり、広く注目されていることに驚かされた。そこでこのシンポジウムでも多くの方にもご参加いただき、発表者あるいは研究者にたいして、さまざまなご意見、ご質問を投げかけていただきたい。このシンポジウムでは、考古学だけでなく文献史学、宗教、城郭などの研究者も加わり、発掘調査による考古学に片寄らない討論と、参加者皆様との質疑による共同作業及び交流を通して、篠本城跡に見る房総の中世を解明していきたいと考える。



霧本城復元図

篠本城跡の調査成果

道澤　明

1．遺跡概要

篠本城跡は光町北部の篠本地区のほぼ中央部にあり、栗山川とその支流に挟まれた東西に連なる台地群は、開析が進んで丘陵のようになり谷津も深く入り込んでいて、城を築くのに絶好の地形を形作っている。篠本城跡のある城山台地は標高35～36ｍを計り、菱形の形をしてその一角が南側に突き出し、周囲は比高差25ｍの急峻な崖となって一気に谷底に落ちている。城山台地の地質は、上部に厚さ２ｍ程の赤土の層とその下50㎝ぐらいの粘土層とが関東ローム層と呼ばれる火山灰で、その下からは水中に堆積した砂層が重なっている。その砂層の最も上が厚さ１ｍぐらいの龍ヶ崎層と呼ばれる赤紫色の縞模様が発達した砂層、次に５ｍ程の赤褐色のかさかさした砂層が木下層、次いで灰褐色のキメが細かく少し堅い７ｍ程の砂層が上岩橋層、さらに10ｍはある灰黒色でキメが粗くさらさらした砂層が清川層で、それぞれ不整合に堆積しているのが見られる。この中で上岩橋層は半不透水層になり、地下水を多く含み、この層に掘られた井戸は水が涸れる事がなかった。

城山のすぐ北側の谷頭部は小字名を大門と呼ばれていることから、そのところが篠本城の入り口であったろうと考えられる。その北には中世以来存続していると伝えられる新善光寺と日吉神社があり、さらにその北には寒風城と呼ばれる城跡がある。向を変えて城山から西へ夏台を越えると、栗山川低地に突き出るように独立丘があり、ここに要害台城と呼ばれる城跡がある。現在の篠本の集落はこれらの城跡に囲まれるように、台地の縁に点在しており、新善光寺の位置も考え併せて、おそらく中世以来変わらぬ姿を現していると考えられる。

2．調査概要

篠本城跡の発掘調査は、平成５年１月に開始して以来すでに３年近くが経過し、Ａ区（城山遺跡）は終了したが、その回りを囲むＢ区（神山谷遺跡）、Ｃ区（谷部分）が未だに継続中で、さらに西側にあるまだ未調査の新台遺跡、夏台遺跡にも、地表面を観察すると城山と同様の整地跡が見られ、これらにも城域がひろがっていると考えられる。

篠本城跡の発掘調査前は、斜面部は樹齢百年を越える椎や櫟の木が鬱蒼と茂り、上の平坦部は一部畑として耕作されていた以外は篠竹が密生して、城跡の形をつかむことがほとんど不可能に近かった。それでも空堀や土塁の跡は確認することができず、あまりたいした城跡ではないだろうというのが、調査前の城跡に対する正直な感想であった。それがまず最初に行う遺構確認調査では、あちこちトレンチを掘っても地山が出て来ない。トレンチの底の土は遺構の中の土のようだ。そうすると城山台地全体に遺構が広がっているということになる。これでは全体を掘ってみないと解らないということになり、ちょうど調査が始まってすぐに年度変わりとなり、新年度は早々に本調査に切り替えて発掘を拡大して行った。

これによって平成５年度の調査では、中央部から西側、さらに南側へと反時計回りに城山の平坦部を発掘し、多くの遺構が出て来た。その結果、台地の縁に沿うようにいくつかのブロックになって、建物の柱穴を多数検出、これが地山が見られない原因であることが解った。また台地中央部に南北に走る堀跡が２条見つかり、予想とは異なる城跡であることが、初期の段階で解って来た。ま

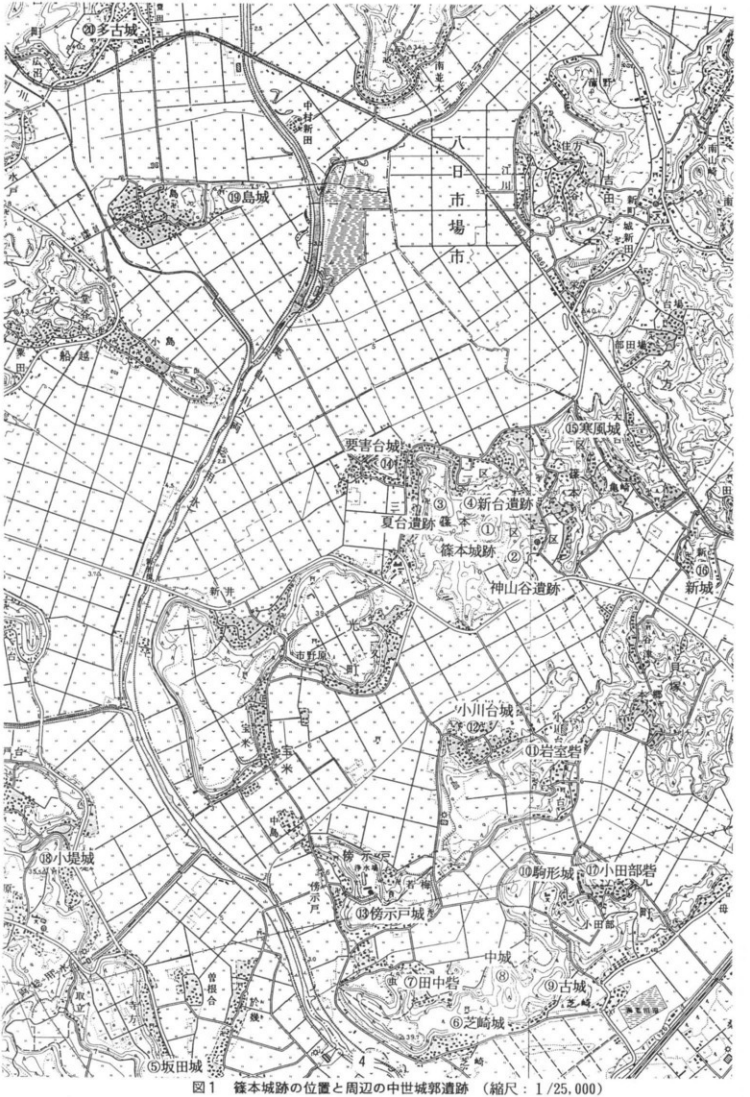


図1　篠本城跡の位置と周辺の中世城郭遺跡　（縮尺：1/25,000）

図2　掘りあがった篠本城跡　（縮尺：1/1,000）

た堀跡の発掘によって、この堀が人為的に埋められたこと、堀に沿って土塁が在ったらしいことも解って来た。城山台地の上にはこれら中世の遺構だけでなく、古墳時代から平安時代の住居跡や土壙墓、古墳の跡が見つかり、遺物では縄文土器も出て来て、古くから人々が活動した場であることが解った。

平成5年度は台地上部の半分近くまで発掘し、6年度は斜面部を重点的に進めることにした。斜面部には当初空堀がないと考えていたが、上部より少し下がった所や斜面部にある平坦部を発掘したところ、予想に反して堀が出て来て、かなりの労力を必要とした。また斜面部には少し広めの平坦部が数箇所あり、そこにも多くの遺構があることが解り、上部とほとんど同じ建物跡や地下式坑などが出て来た。さらに上部では見られなかった井戸跡がいくつも出て来た。

7年度の調査は、台地上部の残り中央部から北側にかけてと、台地北東側の斜面から谷底にかけてである。この調査範囲の中で、特に斜面部から谷底にかけてはいく段にも整地面を造り、それぞれに建物跡や井戸跡を中心とした水場遺構があり、B地区（神山谷遺跡）に続いていると思われる。また斜面部の調査では予想を遥かに越えて、付加的に古墳時代の住居跡や縄文早期の包含層が見つかったりと、今後の遺跡の調査の在り方に考えさせられるものも出て来た。

3．遺構概要

調査概要でも述べたように、中世の遺構だけでも建物跡や堀跡のほかさまざまな遺構が見つかり、非常に色濃い生活臭さと安定した姿が感じられる。それでも堀跡や周囲の崖を見ると、城跡という緊張感も伝わって来て、この城跡を見ると複雑な感じを与える。それでは主な遺構について、簡単に述べていくことにしよう。

建物跡 は柱穴が並んで出ることによってその存在が解る。中世の時代では地方での建物はまだ地面に穴を掘って、そこに柱を埋め込んで立てた掘立柱が一般的で、床は柱にかけた高床、屋根は板か藁葺きであった事が当時の絵図を見ると解る。そのために発掘すると柱穴を見つけることができ、それによって建物があったことが推定できる。しかしこの篠本城跡のように、柱穴が多数発見されると建物がどのように建っていたのか、判断することが難しくなる。ここでは篠本城跡の建物跡の例を二つ示した。1は中央部の最も密集しているところで、なんとなく柱穴が並んでいることは解るが、どのような構造の建物であったかは解らない。おそらくここは3～5回ぐらい建て替えを行っていると思われる。またさまざまな土坑もあり、これが建物とどのような関連があるかも重要である。2は柱穴の並びがはっきりしていて、建物の形がある程度推測することができる。ただこの建物の所も柱穴がずれてもう一組認められ、最低1回は建て替えを行っていると思われる。建て替えを考えずに建物の数をかぞえると、最盛期には城山には20棟あまりあったと思われる。

篠本城跡における建物跡の柱穴の特徴は、平面形が長方形か長円形、長軸断面形が逆三角形か逆山形をしており、埋積土を見ても柱痕が確認できない。これらのことなどから、建て替えあるいは廃絶の時、柱は掘り抜いていったと考える事ができる。

地下式坑 は遺跡の中では、2×3ｍぐらいの大きさで深い坑がそれである。本来は1ｍ四角の入り口となる竪坑と、2×3ｍ程の長方形で天井がある室状の横坑とからなる形態をしている。深さは2ｍぐらいの浅いのから、深いものでは5ｍを越えるものまである。この地下式坑の用途は、食料貯蔵庫、墓坑などが考えられている。他の遺跡の例では人骨が出た例があり、それから墓坑説が有力であるが、篠本城跡では人骨は全く出ず、中から五輪塔、陶器片、貝殻などがたまに出たぐらいで、ほとんど遺物はなく、この状況から食料貯蔵庫ではなかったかと考える。城山では30基余

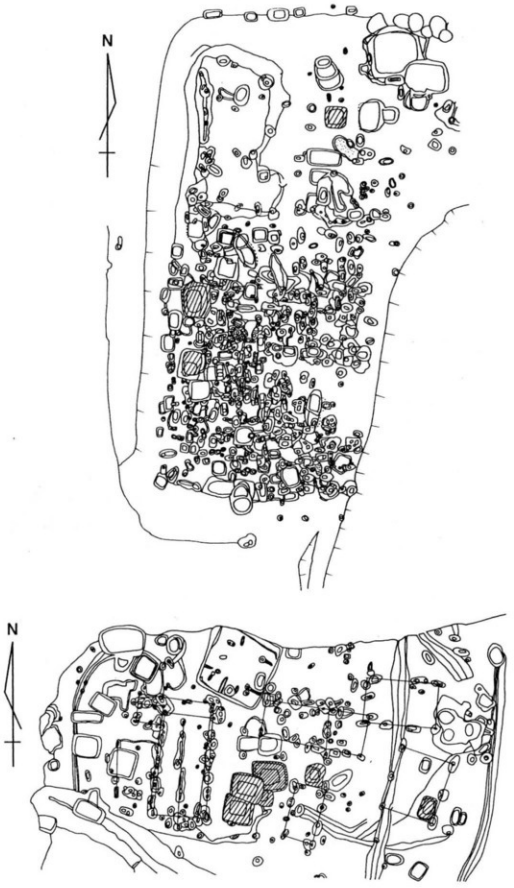
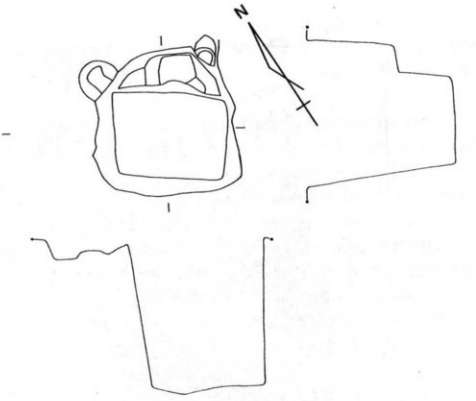
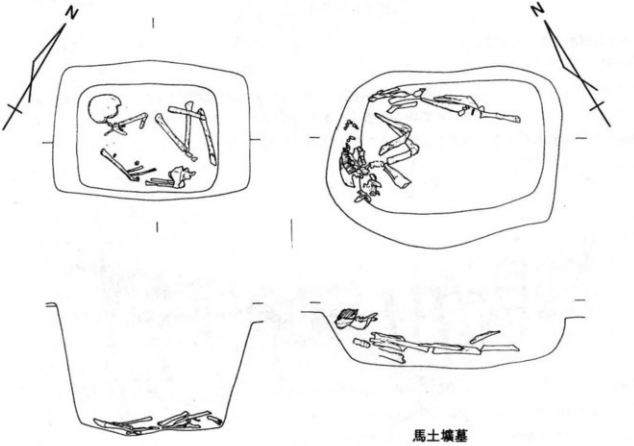


図3　中世の建物跡　（上：台地上中央部、下：台地上北部、縮尺：1/285）



地下式坑



土壙墓

馬土壙墓

図4　土坑のいろいろ（縮尺：①1/40、②③1/20）

りある。

土壙墓 は城山では古墳時代から平安時代のものも多く見つかっているが、中世になると北西部の斜面部か、あるいは各建物ブロックの中に１～２基あるぐらいである。中世の土壙墓からはほとんど人骨が検出され、それと解るが、北西斜面では火葬骨が入った蔵骨器や火葬土坑のほかは、土壙墓と思われる土坑は、骨は解けて残っていなかった。五輪塔や宝篋印塔などの石塔は多数出たが、その数に見合う土壙墓はなかった。

粘土貼土坑 は地下式坑と同じように、建物跡の近くに見つかることが多く、建物と密接な関係があったと考えられる。しかしこれも地下式坑と同じように、土壙墓と言う説がある。実際江戸時代の墓では早桶（粗末な棺桶）の周りに粘土を込めていたという例があるところから、その説が引き出されている。けれども篠本城跡での粘土貼土坑からは早桶の跡も人骨も出なかったため、土壙墓ではないと考えられる。おそらく粘土を張って水の漏れを防ぎ、水を溜めた所ではなかったかと考える。

井戸跡 は台地上部では中央東側の堀の中から１基見つかったが、これは砂層で止まっているため水が湧かず空井戸であった。水の湧く井戸は、斜面部の南東部腰曲輪で２基、北東部下では６基発掘された。いずれの井戸も直径１ｍ程の円形の素掘りで、２～５ｍの深さに掘っている。多くの場合井戸の中からは、多くの石塔が出て来たり、木杭や木の葉、木の実、藁などが出て来た。 **堀跡** は城の形態や構造を示す最も重要な遺構のひとつである。しかし篠本城跡では、城の構造を決めるには不可解な堀跡がいくつか見つかった。その一つは台地中央部を南北に走る２条の堀跡で、これによって台地上を大きく３分割していて、城の中心部を解りにくくしている。二つ目は中央部南北に走る東側の堀は、他の堀と異なって蛇行していてさらに最も深く掘ってある。三つ目は台地上を囲むように、東西両側の斜面部にまで堀が廻っている。このようにさまざまな堀が掘られ、台地上部全体を囲むように廻り、なおかつ城の中心部がはっきりしない。これがこの城跡の性格を表すものであることが、全体と建物跡の発掘によって解ってきた。建物は全体的に階層的な差は余りなく、特に大きな建物は認められない。その建物（群）を区画するように堀が掘られている。また堀は一部途中で埋め戻されたり、堀底道として使われたりしているが、一時期に掘られたものではなく、順次少しずつ掘り広げられて行ったと考える。堀の断面形はＶ字をした薬研堀がほとんどで、はっきりした堀底仕切は北側と東側の堀に認められる程度である。

その他 の遺構では、方形の土坑、階段跡、水場遺構、櫓門？、性格不明の遺構など、中世だけでもいろいろあり、多様な生活が営まれたであろう事が、これらの遺構の発掘によって知ることができる。

４．遺物概要

中世篠本城跡に関連する遺物は、陶磁器をはじめとして銅製品、石臼、石塔など、生活用品類を主に、宗教関連遺物も含んで多数出土した。その中で主なものを取り上げ、述べることにする。

貿易陶磁 とは外国から輸入された陶磁器のことで、篠本城跡からは中国製の青磁と白磁が多数出た。 **青磁** では淡青緑色の龍泉窯で焼かれたと思われる碗、小鉢などがあり、碗では外面に蓮弁文のある古いものから、見込みに字や模様をスタンプした新しいものまである。 **白磁** は割高台の小皿が多く、乳白色から白色のものまである。そのほかの貿易陶磁では、天目茶碗、褐釉茶壷の破片が出ている。

瀬戸 は愛知県の瀬戸地方で生産された陶器で、胎土は乳白色をして柔らかみがあり、ほとんど

すべてに淡緑色の灰釉か、茶褐色から黒色の鉄釉をかけているのが特徴である。篠本城跡の陶磁器の中で種類、量ともに最も多く出ている。中でも最も多いのが 緑釉小皿 で、大きさは直径10㎝で緑に淡緑色の灰釉をかけている所から呼ばれる。 卸皿 は緑釉小皿を少し大きくし内面にヘラで格子状にすじをつけた皿である。 平碗 は削出高台があって朝顔状に開いた碗で、内外に灰釉をかけている。 天目茶碗 は丸みをもって立ち上がる器で、内外に黒色の鉄釉（天目釉）をかけているが、釉は部分的に茶色になっている。 香炉 は下半分が膨らんだ入れ物に、そこに足を３つ付けたもので、口から上半部に灰釉や黒色の鉄釉をかけている。 三足盤 は大きく開いた浅い鉢に、そこに足が３つ付いた器で、口から上半部に灰釉をかけている。三足盤の中には、内面にへらがきのすじを入れて、擂鉢のようにしたものがある。 擂鉢 は今日のものとほとんど変わらず、ただ内面のすじが粗めに入れてあり、表面はざらついた鬼板という茶紫色の鉄釉か、褐色鉄釉をかけている。 瓶子 は徳利形の器で、表面全体に灰釉をかけている。図のものは肩に線が入っている程度であるが、中には唐草模様が入った破片も出ている。 鉄釉四耳壺（祖母懐茶壺） は胴が丸みをもち、口が広めで縁が丸く膨らみ、肩に４つの紐をかける把手が付いた器である。口から胴下半にかけて黒から茶色の鉄釉をかけている。そのほか 仏花瓶、小壺、御歯黒壺、水滴 などが出ている。

常滑 は愛知県の知多半島で焼かれた焼き物で、胎土は赤褐色から黒褐色で粗いが、高温で良く焼き締めて硬く、釉薬はかけずに焼いたときに灰が被ってできた自然釉が二つと無い顔を作り出している。このような釉薬をかけずに硬く焼き締めた焼き物は、 炻器 （せっき）と呼ばれることもあり、ほかに信楽、備前、越前などがある。篠本城跡からは 大甕 の破片が多く出ていて、頻繁に使われていたと思われる。そのほか 壺、片口壺、片口鉢 などが出ている。大甕は水甕に使ったと考えるが、なかには壺とともに割れたものの下半分を、捏ね鉢として使った跡が見られる。壺は１点蔵骨器として出、片口壺は内側に酸化鉄がこびりついていて、御歯黒壺として使われていたことが解る。片口鉢は捏ね鉢として使われたが、１点蔵骨器として出た。

渥美 は愛知県渥美半島で生産された焼き物で、これも常滑と同じ釉薬をかけないで焼き締めた黒灰色をしたｍ器の一種であるが、生産された時期が12～13世紀に限られる。篠本城跡では甕と壺の破片が出たことにより、ここに12～13世紀に住み始めた可能性が考えられる。

土師質土器 は素焼きの土器で、それぞれの地域で身近に生産した焼き物で、形によっていろいろな地域差がある。篠本城跡で出た土器はカワラケ、内耳土鍋、茶釜形土器、香炉などがあり、篠本城かあるいは周辺の下総地域内で生産されたと考える。 カワラケ は直径７～10㎝程度の、皿から茶碗状のものまである。なかにはタール状のものが付いていて、灯明皿に使ったと思われるものから、そこに墨で漢字を書いたものまである。 内耳土鍋 は鉄鍋を模して作ったもので、浅鉢状の形に、内側に紐をかける把手が付いていることから、その名が付いた。下総地方の内耳土鍋は比較的浅めであるが、常陸あるいは上総では深めであるため、地方差が著しい。 茶釜形土器 は鉄茶釜に似た形に、外側に一対紐をかける把手が付いていて、把手は火よけが付いているのが特徴である。内耳土鍋、茶釜形土器とも外面に多くのススが付いていて、火の上にかけて使ったことが解り、これらの器でご飯を炊いたり、煮物を作ったりしたのであろう。 素焼き香炉 は瀬戸製の香炉をまねて作ったものである。

瓦器 は表面を磨いて、黒色に燻し焼きした軟質の焼き物で、産地は畿内地方である。篠本城跡では香炉と火鉢の破片が出ている。

銅製品 では 切羽、大切羽、笄、目貫 等の武具関係、 銅鏡、小銅鏡 の化粧道具、 銅皿、蝶番金具 等の宗教関連のものなど、多様なものが出ている。この中で銅鏡はいずれも縁の近くに２つ

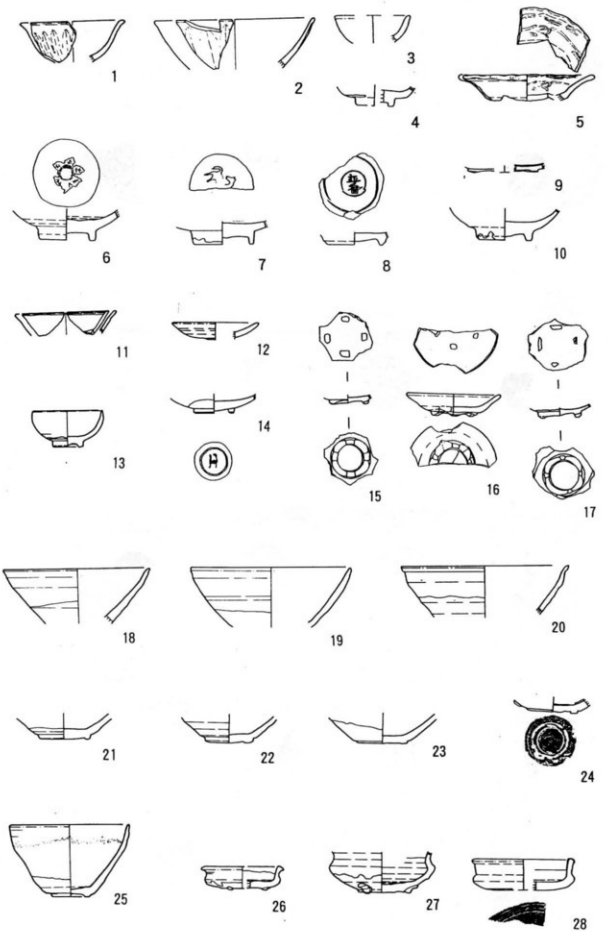


図5　篠本城跡出土遺物1　（縮尺：1/4）

（1・2青磁蓮弁文碗、3・4・6~10青磁碗、5稜花皿、11白磁口剥げ鉢、12・14白磁皿、13白磁碗、15~17白磁割高台皿、16~24瀬戸灰釉平碗、25同天目茶碗、26・27同鉄釉香炉、28同灰釉香炉）

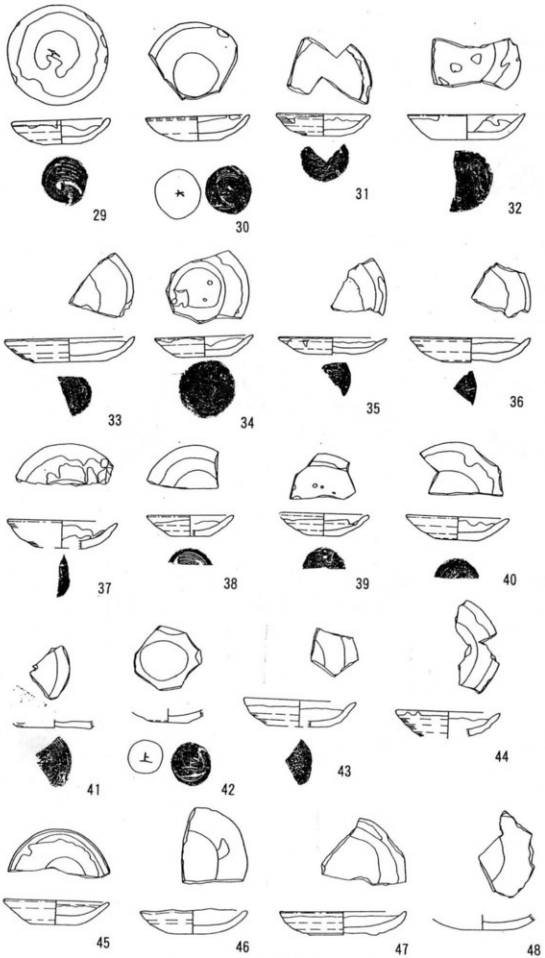


図6　篠本城跡出土遺物2（縮尺：1/4）
（29～48瀬戸緑釉小皿）

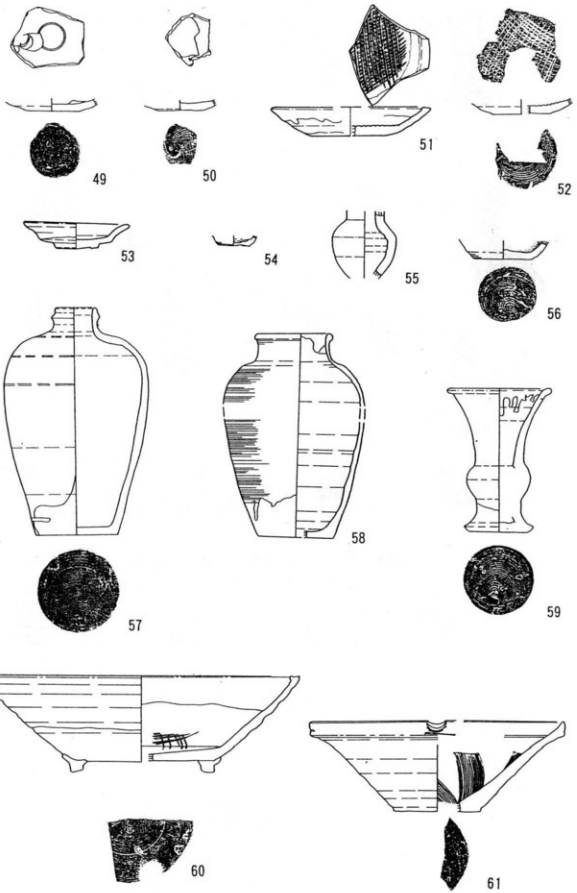


図7　篠本城跡出土遺物3　（縮尺：1/4）

（49・50瀬戸灰釉皿、51・52同卸皿、53同外反皿、54同鉄釉水滴、55同鉄釉小壺、56同御歯黒壺、57同灰釉瓶子、58同鉄釉四耳壺、59同灰釉仏花瓶、60同灰釉三足盤、61同鬼板釉擂鉢）

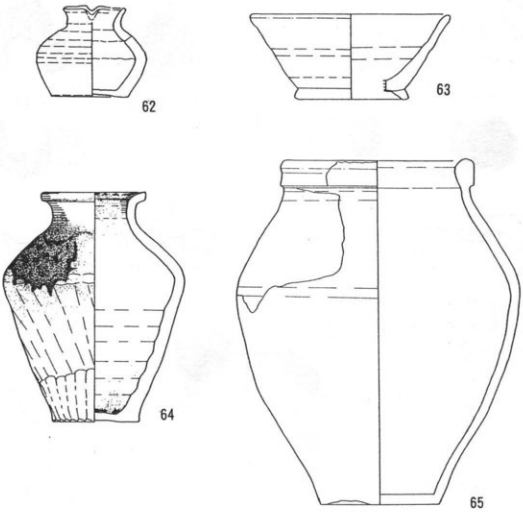


図8　篠本城跡出土遺物4　（縮尺：1/4）
（62常滑御歯黒壺、63同捏鉢、64同壺<蔵骨器>、65同甕

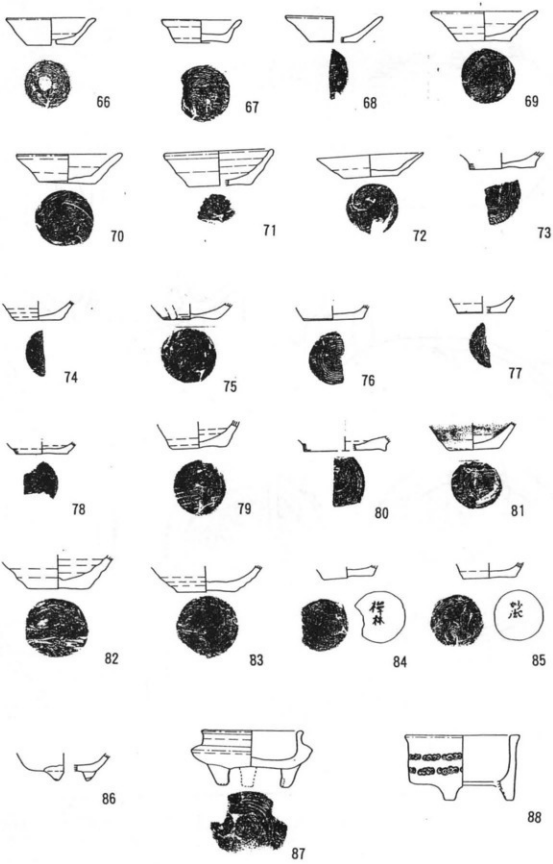


図9　篠本城跡出土遺物5　（縮尺：1/4）

（66～82素焼きカワラケ、83焼締カワラケ、84・85墨書カワラケ<84禅林、85妙胤>、86・87素焼き香炉、88瓦質香炉）

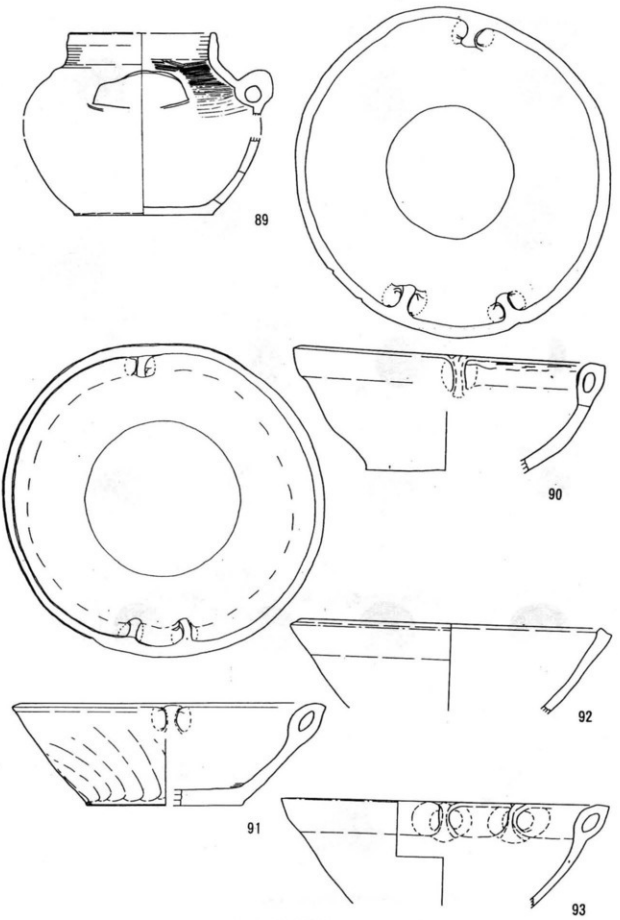


図10　篠本城跡出土遺物6　（縮尺：1/4）
（89素焼き茶釜形土器、90～93同内耳土鍋）

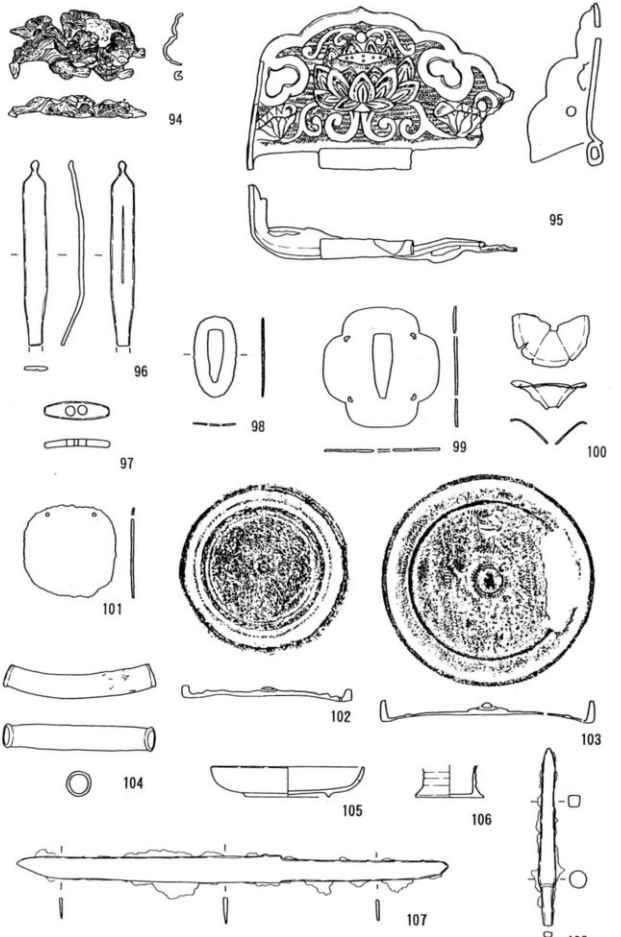


図11　篠本城跡出土遺物７　（縮尺：94･95　1／1、96～108　1／2）
（94金銅目貫、95同蝶番金具、96銅笄、97同鞐、98同切羽、99大切羽、100･104･106同不明、
101~103銅鏡、105銅皿、107鉄小柄、108銅鏃）

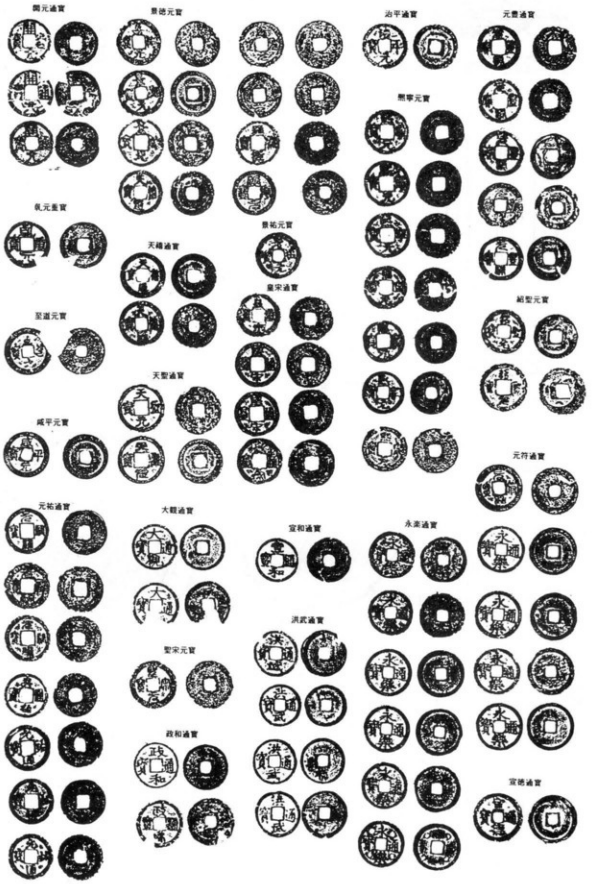


図12　篠本城跡出土遺物８　（縮尺：１/２）
（中国銭22種）

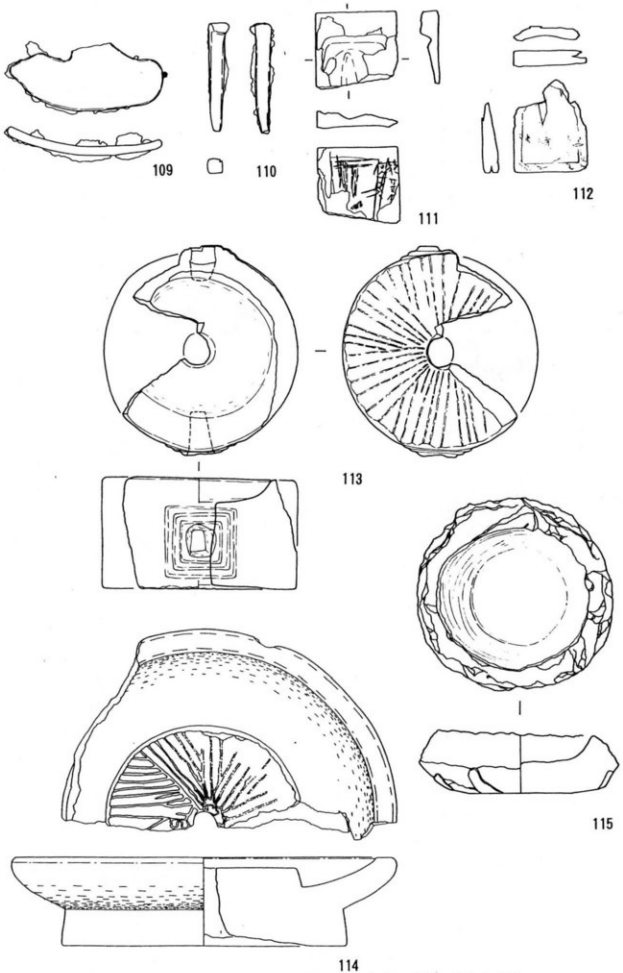


図13　篠本城跡出土遺物９　（縮尺：109･110　1／2、111～115　1／4）
（109鉄火打金、110鉄釘、111･112石硯、113砂岩茶白上部、114安山岩茶白下部、115砂岩石白）

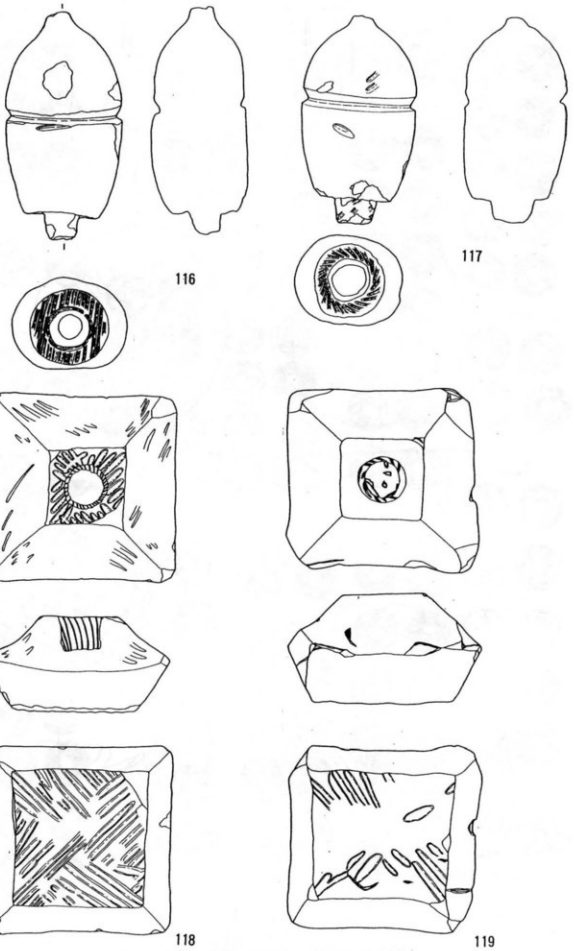


図14　篠本城跡出土遺物10　（縮尺：1/4）
（116・117五輪塔空・風輪、118・119同火輪）

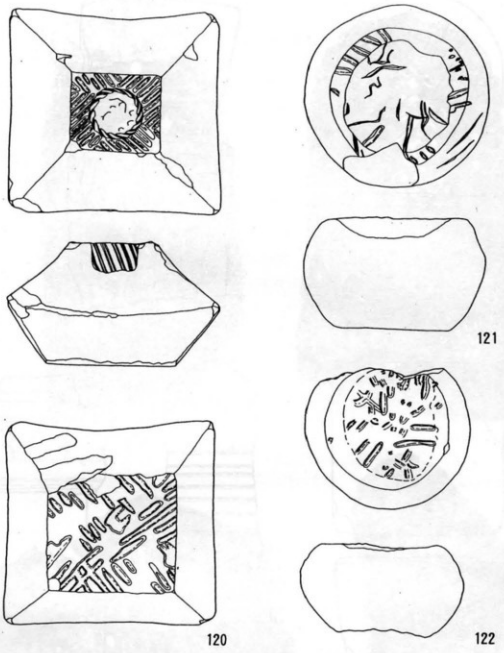


図15　篠本城跡出土遺物11　（縮尺：1/4）
（120五輪塔火輪、121・122同水輪）

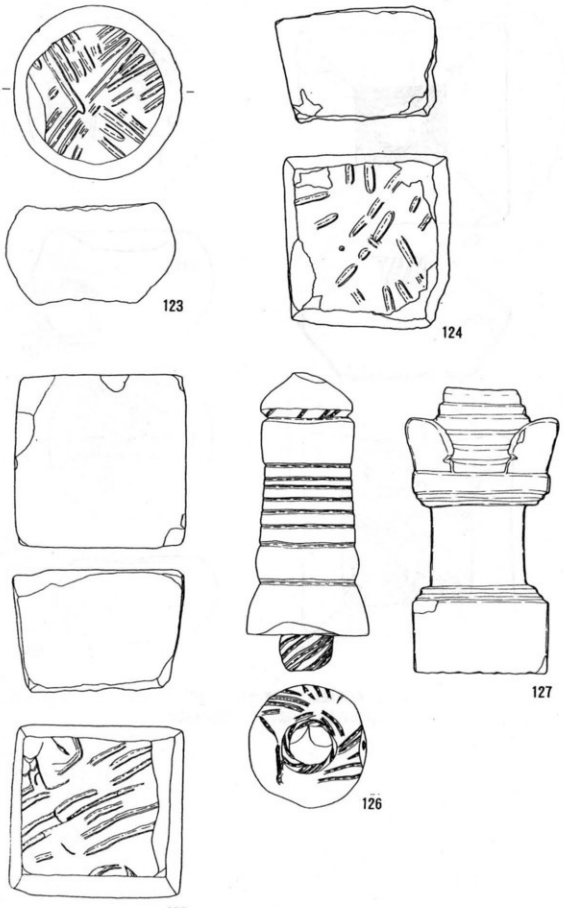
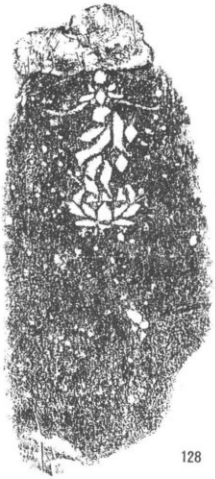
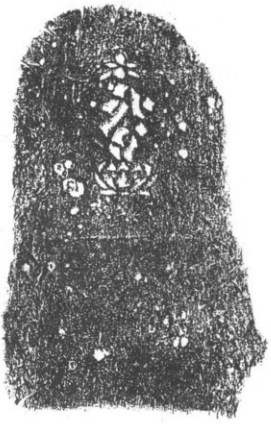


図16　篠本城跡出土遺物12　（縮尺：1/4）
（123五輪塔水輪、124・125同地輪、126宝篋印塔相輪、127一石宝篋印塔）



128



129

130

131

132

図17　篠本城跡出土遺物13　（縮尺：１/４）
（128～131泥岩丸石板碑、132砂岩板碑）

孔をあけてあり、最も大きいものは水場遺構から仏花瓶とともに埋納された状態で出、宗教的にも関連する。裏面に文様のある銅鏡は、腐食が進んでいて文様が判然としない。蝶番金具は表面に細かい蓮の花の彫金が施され、鍍金が良く残っている。目貫も細かい彫金で連獅子を作り、鍍金されている。

鉄製品 は 小柄、鐺 等の武具、火打ち金は生活用具があるがともに少なく、最も多く出たのは釘である。また鉄滓も出ているが、はっきりした鍛冶遺構は見つからなかった。

中国銭 は200枚ほど出ている。中世の日本では貨幣を造ることはなかったので、貨幣経済が発達する中で、必要となった貨幣を中国から輸入した。それが中世の社会に、大量に流通した中国銭である。篠本城跡でも最も古い唐代の **開元通寶** から、明の **永楽通寶** まで20数種類の中国銭が出ているが、まとまった埋蔵銭ではなく、あちこちから散在して出た。

石臼 には食べ物をつぶすのに使った普通の **石臼** と、茶の葉を粉にする二つで一組になる **茶臼** とがある。普通の石臼は銚子産の砂岩を使っているが、茶臼は砂岩のほかに安山岩を利用している。両者とも破片を含めると、多く出ている。

石塔 には五輪塔、宝篋印塔、板碑などがある。 **五輪塔** は空風輪、火輪、水輪、地輪 の４つに分かれた石ででき、 **宝篋印塔** は相輪、笠、塔身、基礎の４つからでき、ともに銚子産の砂岩を使っている。どちらも梵字を彫ってあったりするが、篠本城跡から出たものには何も彫っていなかった。

板碑 は緑泥片岩製の武蔵形、黒雲母片岩製の下総形があるが、ここでは飯岡石と呼ばれる偏平な楕円形の石を使った板碑が出ている。この板碑には、阿弥陀如来を意味する梵字と、その上に天蓋、下に蓮台が彫ってあるだけの簡単なものである。

以上、篠本城跡からは多くの遺構と、多種多様な遺物が出て来た。近年では城跡を丸ごと全体を発掘調査することが増えてきて、埋もれていた城の本来の姿が次第に明らかになりつつあるが、篠本城跡のようなあり方はほかでもあまり類を見ないもので、これからの中世城郭の研究にまた一石を投じることになるだろう。

この章の終わりに、発掘調査や整理またこの概要をまとめるにあたり、シンポジウムで発表いただく諸氏はじめ、多くの方々からご教示、ご助言を賜った。ここに御礼申し上げます。

中世篠本郷の武士と村落

—— 文献・史料から見た「篠本城」周辺 ——

伊藤一男

1　匝瑳篠本郷の概観

下総・匝瑳郡篠本郷は、房総半島の東側、九十九里平野を流培する栗山川の中流域左岸に位置、平野背後の東総丘陵（関東ローム層）の浸蝕谷を中心に展開していた。奈良・平安時代、『和名抄』の「匝瑳郡石室郷」に属して、８世紀の史料には「磐室郷」との記載が認められる（『正倉院宝物銘文集成』）。現在、その郷域は不明とするほかないが、近代地誌学の成果の一例に、１）小川台・傍示戸・富下・貝塚を中心に、２）小田部・芝崎・虫生、３）篠本・二又・新井・市野原・宝米・亀崎などの地域を比定するものがある（村岡良弼『日本地理志料』第19巻〈下総〉）。事実、城山遺跡の周辺には、夏台・神山谷・城ノ台・新台・根切・大倉台など、奈良～平安期に属する土師器の散布地（註１）が多く、特に神山谷からは100軒単位の集落遺構が検出されている（発掘調査：東総文化財センター）。

平安末期の12世紀以降、『和名抄』の「匝瑳郡」が分割・再編され、中世的所領単位としての匝瑳南条（庄）・匝瑳北条（庄）・千田庄・玉造庄などの荘園が分立した（『吾妻鏡』文治２年３月12日条）。古代「磐室郷」の地が属した「匝瑳南条」は、紀伊・熊野山領の荘園であるが、借当川（栗山川支流）以南の地を荘域とした。史料上、確認される中世村郷としては、現八日市場市域の「福岡郷」「飯倉郷」「米倉郷」「吉田郷久方村」、現光町域の「飯倉郷谷中村」「篠本郷」などが認められる（註２）。

この中世の匝瑳南条は、「匝瑳南庄」「匝瑳南条庄」とも呼ばれ、単に「匝瑳庄」と私称される場合もあった。13世紀以降、千葉氏系の椎名氏一門が荘内各地に土着、積極的に「新田開発」を進めていたが、やがて荘域は「東方」（熊野山領）と「西方」（推定：金沢称名寺領）に分割され、開発領主の椎名氏は「領家」との間に相論を展開している（註３）（「金沢文庫文書」）。

この12世紀末における古代匝瑳郡の解体・再編、さらに13世紀以降に見られる匝瑳南条の「東」「西」分割への過程において、磐室郷（石室郷）の地域も中世的変容を余儀なくされるに至ったものと推測される。当該地域の開発主体者である椎名氏の始祖胤光は、源平騒乱が終息した12世紀の最終末、「南条庄地頭職」を得て移住するが、現地における支配・経営の安定とともに、その所職は野手・松山・飯倉・福岡・岩室・小田部など、「郷」を単位として子息達に譲与された（『神代本千葉系図』『千葉大系図』）。これら胤光の子息達は、譲与された所領を保守するに留まらず、積極的に新田開発を進め、新たな村郷を形成して、さらにその子息達に分与していった（註４）。

以上のような経緯から推して、磐室郷の故地には、遅くとも13世紀中葉までには、岩室・小田部・芝崎・富下などの中世的村郷が形成されていたものと思料される。さらに、14世紀前半、千田庄近傍の在地武士として「竹元」が確認され、篠本郷の成立が想定される（「金沢文庫文書」）。例えば、『神代本千葉系図』中の「飯竹」（いいざさ／飯篠・飯笹）の用例から推して、竹元＝篠本（ささもと／笹本）とみて大過なく、さらに『弘経寺縁起』（註５）中に「竹元寺」（ささもとで

ら）の記述が認められるのでほぼ確実であろう（関口貞治家文書）。16世紀以降、地方史料に「篠本郷」の表記が現れ、あるいは「青見原（おみはら）」「宿（しゅく）」「中内屋敷」「馬走（ばばしり）」「新善光寺」「本寿院」など、中世末期の地名・寺院名が出現する。

また、篠本郷内には城山遺跡以下、城ノ台・要害台などに中世城跡が現存するが、時期的には14～16世紀の所産とみられる。いずれも当該地区を拠点とした地方武士の居館跡であるが、史料的には15世紀の初頭、千葉満胤の家人（被官）であった「竹元六郎」の存在が知られる（「香取文書纂」）。16世紀以降、郷内に所領を与えられた「井田刑部大輔」、寺院支配に関係する「椎名伊勢入道」、弘経寺の開基である「加瀬靭負佐」などが記録されている。さらに、城ノ台遺跡（寒風城）の城将に比定される「椎名右衛門大夫」、要害台遺跡を守備したとみられる「椎名神九郎」「椎名神五郎」、千葉邦胤から官途を受けた「椎名左馬允」など、篠本郷は戦国末期に至るまで椎名氏の支配下にあったのである（「下総旧事」）。14世紀以降、当該地域を支配した上級領主は千葉貞胤以下、千葉満胤・千葉邦胤・椎崎勝信など佐倉城の千葉氏であった。一方、16世紀の千葉氏による高野山信仰、特に宿坊守来諸庄注進の中に「篠本郷」が挙げられていることは注目される（註6）（内藤泰夫家文書）。

天正18年（1590）の小田原城の敗滅後、関東地方は徳川家康の支配下に属したが、篠本郷（村）は徳川氏家臣団（旗本）の知行地となった。このとき、「中内屋敷」の加瀬太左衛門（旧土豪層）は郷内に土着・帰農、さらに近傍「馬走」に分地・家作している（関口貞治家文書）。17世紀後半、総州代官の関口氏による「見立新田」（寅新田）が成立、その後も新田開発が進められ、篠本村の村高は1021石から2101石へと倍増している（『東金御鷹場旧記』『元禄郷帳』『天保郷帳』）。近世初頭、篠本村の近傍には、栗山川沿岸の仮称「多古湖」（たこのうみ）の残存湿地が連なり、「上沼」「下沼」の沼沢群、「上野」「下野」「大蒲」の荒蕪地など、広大な面積の可耕地が展開していた。17～18世紀、数次にわたる新田開発が推進され、やがて「古新田」「内新田」「上新田」「下新田」「五町」「百石」などの新耕地が開拓されていった。

村勢の史的変遷（近世以降）

寛永８（1631）	篠本村検地実施（『匝瑳郡地方史年表』）
延宝２（1674）	村高1021石　旗本稲垣氏・岡野氏の相給（『東金御鷹場旧記』）
同	「寅新田」（総州代官見立新田）が成立（関口貞治家文書）
元禄15（1702）	村高1904石（『元禄郷帳』）
宝暦11（1761）	村高1904石　幕府・本間氏・青木氏・岡野氏の相給（『下総国各村給分』）
天保５（1834）	村高2101石（『天保郷帳』）
弘化２（1845）	家数199軒（「関東取締出役控帳」）
明治元（1868）	村高2092石　松平氏・岡野氏・本間氏・青木氏・本目氏の相給（『旧高旧領取調帳』）
明治８（1875）	千葉県香取郡に編入
明治22（1889）	香取郡日吉村の大字に編入
昭和29（1954）	匝瑳郡光町の大字に編入

【註】『角川日本地名大辞典12〈千葉県〉』「篠本〈匝瑳郡光町〉」の記事（407・1321頁）より要約・作表。

2　史料に見る在地武士の動向

すでに前項では、古代末期から近世初頭にかけて、「篠本郷」の史的変遷について整理・概観した。以下、本項においては、中世後期の関係史料に基づいて、篠本郷内における在地武士の動向に注目してみたい。

〈史料１〉　建武２年（1335）と推定される氏名未詳書状断簡（「金沢文庫文書」）によると、下総千田庄における千葉氏内紛（註７）の際、千田孫太郎と子息の瀧楠は千葉介貞胤と一味同心、千田胤貞の大嶋城を攻撃すべく画策していた。このとき、篠本郷の在地武士とみられる「竹元（氏）」は、岩部中務□（卿）などと合力の上、「国中の軍勢を集候」て出陣したが、結局は「けわしき合戦は未遂候」の状況に終始したとある。

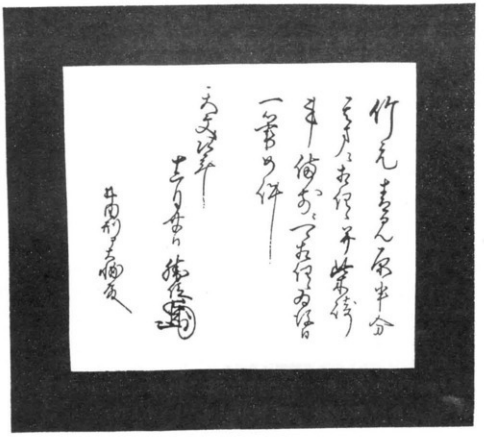
〈史料２〉　応永13年（1406）10月に作成された香取社造営料足納帳（註８）（『香取文書纂』）によると、「香取御造営料足事、拾四箇年分、可致催促由、被仰間、応永十三年丙戌□月日、以切符相触候内、納帳」とあり、同14年２月27日付で「竹元六郎殿分　竹元（篠本）　田数一町二反大三十五歩　分銭九百六十文之内　四百八十文納」と記されている。この記事によって、15世紀初頭、千葉満胤の家人（被官）である「竹元六郎」が、当地内に所領１町２反余（田地）を得ており、その分銭960文が香取社（佐原市）の造営費用に充てられたことが知られる。さらに同納帳によって、当地に隣接する「亀崎」の地内に、「三谷孫六」の所領１町７反余が存在したことも判明する。

〈史料３〉　天文４年（1535）12月20日付の姓未詳勝信知行充行状写（『楓軒文書纂』巻50）に、「竹元青見原半分其方ニ相任候」とあり、井田刑部大輔（友胤）に当地内の「青見原（おみはら）半分」（比定地未詳）を知行せしめている。併せて「柴崎事、備前ニ可相任候」とあり、「柴崎（しばさき／芝崎）の地を「備前（守）」（椎名氏か）に宛給する旨を告げている。ここで問題となるのは、発給者の「勝信」であるが、天文18年（1549）８月16日付の姓未詳常真判物（「上総逸見文書」）と花押形が一致（註９）、実名「勝信」を名のり、道号「常真」を用いた人物であるこ

中世後期の篠本郷と在地武士

史料	年　代	地　名(郷)	在地武士	上級領主	備　考
1	建武２年＊		竹　元	千葉貞胤	軍勢合力
2	応永13年	竹　元	竹元六郎	千葉満胤	用途負担
3	天文４年	竹元青見原半分	井田刑部大輔	勝　信	所領宛給
4	天文５年	竹元寺			寺院改宗
5	天文８年	篠本郷新善光寺	椎名伊勢入道		寺院支配
6	永禄４年＊		椎名右衛門太夫		出陣消息
			椎名神九郎		
			椎名神五郎		
7	元亀３年	本寿院弘経寺	加瀬駒負佐		寺院開基
8	天正２年		椎名左馬允	千葉邦胤	官　途
9	天正５年	篠本郷		千葉邦胤	高野山信仰
10	天正18年＊	中内屋敷	加瀬太左衛門		土着帰農
11	慶長10年	馬　走	加瀬与左衛門		分地家作

【註】　本表中、年代欄の＊印は、記事内容による推定年代を示した。



勝信知行充行状写

〈天文４年12月20日付／推定：椎崎氏〉（『楓軒文書纂』巻50所収）

とが知られる。加えて『楓軒文書纂』中、千葉勝胤書状写・足利義明判物写などの記事内容によって、この勝信が千葉勝胤の庶子「椎崎殿」であった可能性が高いことを指摘できる。

〈史料４・７〉　近世後期の著述とみられる『弘経寺縁起』（関口貞治家文書）によると、篠本（宿）の日蓮宗弘経寺は、本来「真言宗竹元寺（ささもとでら）」の末寺であったが、天文５年（1536）「鳴村妙光寺」（多古町）の末寺に移り、元亀３年（1572）９月、日蓮宗に改宗した。開山上人は「正善院日宝」とされ、開基檀那は「加瀬靭負佐」（恒正）と記される。江戸時代の弘経寺は、山号を「五大力山本寿院」と称したが、「日蓮大士」を本尊として、一致派に属して中山法華経寺の末寺であった。

〈史料５〉　天文８年（1539）５月27日付の椎名勝定書状写（西光寺文書／「下総旧事」）によると、飯倉城主とされる椎名伊勢入道（勝定）が、西光寺の照源法印に対して、「篠本之郷新善光寺」を知行せしめている。15世紀以降、東総地方における真言教学の道場として知られた西光寺（八日市場市）は、山号を「米倉山白毫院」と称して、山城国宇治郡醍醐三宝院の末流に属する古刹であった。寺伝によると、応永34年（1427）６月、鏡照上人の開山とされ、外護者は飯倉椎名氏であった。開山の鏡照上人は、匝瑳北条庄内山村の出身とされ、文明８年（1576）に至る約50年間、寺院の経営と教学活動に努めた。同時に、教線拡大にも奔走して、遂に「直触寺院八箇寺」を開創している（「西光寺由来書」）。この八箇寺とは西光寺以下、等明寺（米倉）・見徳寺（福岡）・宝光寺（貝塚）・般若寺（松崎）・新善光寺（篠本）・広済寺（虫生）・西蓮寺（小田部）の寺々

原胤長の注進状は、邦胤提出の判物に副えて、「千葉介後見」の名において発給されている。高野山信仰の実態は不明であるが、16世紀段階における千葉氏の所領を把握する上で、極めて示唆的な内容を含んでいる。史料中、「鳴戸領諸郷」とあるのは、鳴戸領（成東町付近）の誤りであるとみられる。さらに「九十九里諸郷」とは、武射南郷以下、須賀郷・横根郷および野中村・三川村など、臨海低地に位置する九十九里北部の村郷であったものと推定される。これらの諸郷とともに、篠本郷が千葉氏所領として把握されていることは、当該地域における在地支配の構造を考える上で注目される。

〈史料１０・１１〉　1760年代の作出とみられる『加瀬家由来書』（関口貞治家文書）には、「加瀬太左衛門胤正　号本覚院行道（中略）北条家没落之後百姓と成、其切ハ富貴ニ而殊に田畑も下値成故多求て名田とす、田畑高百三拾九石七斗三升八合也」とある。この記事によって、天正18年（1590）以降、旧土豪層の加瀬胤正は、逃散することなく居領地（中内屋敷）に土着、買徳地を集積して持高139石余の豪農経営を展開したことが知られる。さらに「其子与左衛門仲恒　号了善院道繁　中内屋敷不宜由ニ而、慶長十年馬走江家作、高九十三石所持」ともある。近世移行期の加瀬家は、徳川家から「壱人百姓」を許された特権層で、慶長10年（1605）現住地である「馬走」へ家作・移住したとされる。仲恒嫡子の作兵衛満継は、母方・関口家の名跡を嗣いでいたが、元和元年（1615）４月、将軍秀忠に召され士分に列して、「総州御代官被仰付、知行所上総国小西ニ居住」したとされる。さらに、満継次男の作左衛門正満は、父から代官職を世襲、上総小西（大網白里町）に陣屋を置き、「下総・上総ニ而十七万石支配」したとされる。幕府の直轄地である「御料所」（天領）の代官は、可耕地の開墾を奨励するとともに、自らも積極的に沼沢・原野など適地を見立てて、近在の有力農民に開発させた。開発が成功した場合、「分一下与」と称して、新田年貢の10％が終身支給された。篠本村の場合、延宝２年（1674／甲寅）関口正満による「見立新田」が成功、この新耕地は後世「寅新田」と呼ばれた。また、延宝４年（1676）両総一帯は不作で、代官衆は未進取立に苦慮していた。かかる情況下、同５年７月26日、正満は「子息二人」とともに、突然に切腹（註10）を命じられた（『徳川実紀』）。

３　地名分析と「篠本郷」復元

１）篠本地区の「字」地名

竹内理三博士によると、地名は「人間の生活上、必要な土地を示す記号」として発生、時期的には「文字より古い」とされる。さらに、その原点が「字」（あざ）に象徴されるごとく、本来、地名は「小地域の人間生活の投影」として創造されたとされる（『角川日本地名大辞典12〈千葉県〉』）。現在、公認されている「字」地名には、「大字」と「小字」の２種類があり、ともに市町村区域内の１区画を示すものである。この「字」地名の制度は、明治22年（1889）の「町村制」施行とともに成立するが、原則として大字は江戸時代の「村名」、小字（字）は村内の「集落名」「耕地名」などが採用された。

すでに整理・紹介したごとく、地名は人間生活の必要上、創り出されたものである。城山遺跡が所在する光町篠本地区の場合、合計81項の「字」地名が認められるが、それぞれの誕生には歴史的背景があるものと考えられる。ここで「字」地名の単純な性格的分類を試みると、１）自然地名18項、２）人文地名48項、３）特殊地名15項を拾うことができる。

で、いずれも匝瑳南条庄における椎名氏の所領地に所在している。このうち、新善光寺・見徳寺・広済寺の諸寺は、西光寺住職の輩出寺院である。篠本（古河内）に所在する新善光寺は、山号を「殿谷山光明院」と称して、「弘賢」の仏師銘を有する鎌倉時代作出の「銅造阿弥陀如来立像」（善光寺式三尊像／県指定文化財）を本尊仏とする。朱鳥元年（686）の開山と伝える古刹であるが、西光寺住職の宥賀（3世）・尊誉（5世）・照源（7世）などを輩出、照源上人は天文13年（1544）まで在職した。

〈史料6〉　永禄4年（1561）と推定される5月8日付の椎名康胤書状写（「下総旧事」）によると、「其春景虎至小田原進発」の際、篠本郷の在地武士である「椎名神九郎」「椎名神五郎」の両名は、地理不案内のために出陣に遅れたとある。彼等の「指南」とみられる「椎名右衛門大夫」（康胤）は、安房里見氏の部将「正木大膳亮」（時茂／小田喜城主）に対して、両名の不参陣の経過を報告した結果、「正大無疎意旨返答」したことを告げている。さらに、両名が「御知行方者不入御手」状況にあったので、「正木十郎方当地在留之事候間、御存分之通可申望候」と指示している。本史料は「篠本村椎名源之丞家」の旧蔵文書で、現当主は椎名健治氏（宿）であるが、すでに原本は紛失した由である。宛名の「神九郎」は、『椎名家系譜』中の「就胤（なりたね）」に比定され、要害台の城跡を守備していたものと推測される。また、発給者の椎名康胤は、篠本郷の在地領主とみられ、その居館地は「寒風城」が最も有力である。1560年代、当地周辺の千葉氏庶流（椎名・三谷）は、本宗家に対して反抗・離叛を働いていたが、永禄3年（1560）と推定される8月6日付の千葉胤富書状写（『楓軒文書纂』）によると、「椎名右衛門大夫・三谷小四郎、其外両人之同名中」の「馬寄」不参加が懸念される情況にあった。さらに「万一此面々、致無沙汰候者、美濃守同前ニ口惜之由、可被仰付」旨を告げているが、井田美濃守が椎名・三谷両氏に対して「指南」的立場にあったことが知られる。永禄4年3月上旬、長尾景虎（上杉謙信）の越山とともに、椎名康胤は里見氏に従軍、小田原城の包囲作戦に参加した。このとき、要害台の椎名就胤は、地理不案内のために参陣できずに帰国した。篠本郷周辺の在地は、すでに千葉氏によって掌握され、木積・久方・山桑・谷中・富下・貝塚・市野原・新井・中沢など、「匝瑳面一跡」の地が井田氏に宛給されていた（『楓軒文書纂』）。当時、下総東部には勝浦城の「正木十郎」（左近大夫／時忠）が進駐しており、椎名康胤は「御存分之通可申望候」と指示している。

〈史料8〉　天正2年（1574）閏11月24日付の千葉邦胤官途状写（「下総旧事」）によると、飯倉城主とみられる椎名胤長に対して、「左馬允」の官途名を許可している。この左馬允胤長は、史料5で検討した椎名勝定の子息と推定されるが、『椎名氏歴代譜』（仮称／椎名惣治郎家文書）によると、同13年（1585）正月17日に逝去、戒名を「正覚院殿法泰蓮慶大禅門」と号している。

〈史料9〉　天正5年（1577）3月16日付の原胤長注進状写（内藤泰夫家文書）によると、高野山蓮華三昧院に対して「当国中以先例御宿坊守来諸庄之分」を注進しているが、「佐倉内外惣庄」以下とともに「嶋戸領諸郷」「篠本郷」「九十九里諸郷」が記されている。戦国期千葉氏の高野山信仰は、正長元年（1428）8月、千葉介胤直の登拝に始まるが、この時に「所領上総・下総分国之人々、己後永々<u>蓮院御庵室可為宿坊</u>」との師檀契約を結んでいる（『高野春秋』／『大日本仏教全書』所収）。以降、千葉氏および分国諸衆による高野山登拝の際には、蓮華三昧院を宿坊とすることが恒例となった。この宿坊契約は千葉氏の歴代によって継承されたが、天正5年3月16日、千葉邦胤は「当山宿坊之事、如先例、不可有相違候」との判物を蓮華三昧院に送っている（内藤家文書）。

「字」地名の性格的分類

【自然地形】
〈沼沢等〉　蓼沼　上沼　下沼　清水　中清水　川端
〈荒蕪地〉　上野　下野　下埜　大蒲
〈丘陵等〉　山ノ崎　峰崎　谷津
〈植　物〉　榎台　柿木　二本松
〈季　節〉　夏台　寒風台

【集落関係】
〈集　落〉　宿　鍛冶谷
〈祭　祀〉　稲荷　浅間　浅間脇　天神　妙見台　神山　神山谷　宮前　宮ノ後
〈交　通〉　舟戸　舟戸前　新橋

【城郭関係】
〈城　郭〉　城山　城ノ台　要害台
〈防　禦〉　大門　折戸　根切　腰巻
〈関　連〉　馬場走　打越　打越下

【開発関係】
〈耕　地〉　和田　太田　八石田　八丁(町)　上永荒　下永荒　代官　上ノ町　昭和
〈新　田〉　古新田　東新田(寅新田)　内新田　上新田　下新田
〈五　町〉　上五町　中五町　下五町　上新五町　中新五町　下新五町
〈百　石〉　上百石　中百石　下百石
〈水・利〉　打越堰

【特殊地名】
〈吉　祥〉　亀崎　松内台　清谷　清谷台
〈位　置〉　東前　西前　南前　向田　境田
〈不　明〉　新台　古河内　縫ノ内　半平　桟敷　田中崎

【註】　『角川日本地名大辞典12〈千葉県〉』「小字一覧」（1481頁）より抄出・作表。

1）　自然の地名では、篠本地区の立地とも関係して、沼沢・湧水・河川などの低湿地、さらに荒蕪地・丘陵等に関係する地名が多い。とりわけ、上沼・下沼・上野・下野・大蒲など、旧多古湖の残存湿地を想定させるものが多く、すでに消滅した内陸水系を復元する上で重要である。

2）　人文地名では、開発関係24項・集落関係14項・城郭関係10項といった内訳である。以下、各項目の特徴点を整理してみたい。

① 開発関係の地名には、延宝2年（1674）以降の「新田開発」に由来するものが多く、耕地9項・五町6項・新田5項・百石3項・水利1項といった状況である。特に、「百石」「五町」などは、17世紀以降の開拓地とみられ、「古新田」「内新田」などの初期新田とは区別されていた。一方、中世の耕地は、丘陵を刻む「谷津」（浸蝕谷）の開口部周辺、さらに山麓部の「和田」「上ノ町」などに限定されていたものと考えられる。

② 集落関係の地名は、祭祀9項・交通3項・集落3項によって構成されるが、集落の内部構成を示すものは極めて少ない。まず、稲荷・浅間・天神・妙見など、村内に祀られた神々を示す地名が多く、特に「妙見台」は城ノ台遺跡（寒風城跡）との関連が推測される。また、交通

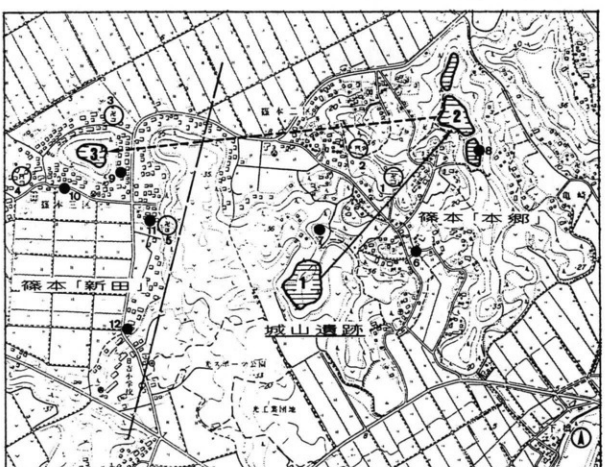
関係では、舟運の拠点を連想させる「舟戸」、近世の架設とみられる「新橋」などが注目される。中世の「村」を示す地名は、その多くが消滅したものか、わずかに「宿」「鍛冶谷（作）」を拾うのみである。

③ 城郭関係の地名では、「城山」「城ノ台」「要害台」など城郭地名3項が認められ、それぞれに中世城跡（遺構）が現存する。また、「大門」「折戸」など防禦施設が存在したとみられる地名4項、「馬走」「打越」など城郭に関連するとみられる地名3項を拾うことができる。

3） 特殊地名としては、亀崎・松内台などの「吉祥」地名4項、東前・向田など「位置」を示す地名5項がある。しかし、新台・古河内・縫ノ内・半平・桟敷・田中崎など、意味の不明なものも数多く存在する。

2）歴史的景観の復元

篠本地区の「字」地名は、前項のごとく整理・分類されるが、中世にまで遡れる地名も少なからず確認された。以下、本項では、地名分析の成果を援用して、「篠本郷」における歴史的景観の復



中世篠本郷概念図

【城　郭】 1.城　山　2.城ノ台　3.要害台
【社寺等】 1.新善光寺　2.山王権現　3.弘経寺　4.熊野神社
5.三行寺　6.谷　津　7.「神山」　8.「妙見台」
9.「宿」　10.舟　戸　11.中内屋敷　12.「馬走」

元を試みたい。

中世後期の「篠本郷」の地域構成は、現在の篠本一区および同二区を領域とする「本郷」を基本集落として、同三区付近に比定される「新田」を付属していたと想定される。まず、篠本「本郷」の集落は、「谷津」から「和田」にかけて、東西方向の浸蝕谷を中軸線として、台地の傾斜面と谷地出口部の微高地上に占地、数軒単位の屋敷地が展開していたものと推測される。「本郷」の中央部、「浅間」から「谷津」にかけての谷地には、高低差の大きい水田＝棚田が連続している。まさに中世の雰囲気を残す耕地景観であるが、当時は「殿谷」と呼ばれたらしく、新善光寺の山号にその遺称を留めている。

この「谷津」耕地に隣接して、在地武士の居館地である「城山」、鎮守社の故地とみられる「神山」が存在する。「城山」の丘陵上には、15世紀～16世紀初頭と推定される城郭遺跡が現存、形態・範囲ともに不明ではあるが、僅かに土塁状遺構が確認されていた。古くから「篠本城趾」と呼ばれてきたが、大正期の『香取郡誌』（註11）には、「篠本城趾　字城山に在り、一大岡丘を為す。広さ数町に亘り、砦趾歴然たり。また、近傍に大門等の字地あり。」との記事が認められる。一方、「古河内」の地には、「山王権現」と称された旧村社・日吉神社が鎮座、新善光寺・長善寺などの真言宗寺院も存在していた。

さらに本郷の北方、「城ノ台」の地にも、16世紀と推定される城郭遺跡が存在、その形態は６郭から成る直線連郭式で、土塁・空堀・腰曲輪などの遺構を留めている。古くから特別に呼称はなく、『香取郡誌』中に「字城ノ台に有りて、今概ね畠地たり。二重堀等の跡尚存す。」と記されるのみであった。その後、千葉県教育委員会の「中近世城郭調査」によって、戦国末期の築城であることが判明、遺跡名称「寒風城跡」として広く紹介されるに至った。

また、篠本「新田」の集落は、基本的には17世紀初頭の成立とすべきであるが、その起源を中世末期にまで遡らせても大過ないであろう。すなわち、旧多古湖に臨む「要害台」の独立丘陵上に、16世紀末と推定される城郭遺跡が現存、単郭ではあるが土塁・腰曲輪などの遺構を留めている。『香取郡誌』の記事中には、篠本城趾の項に続けて、「其一部に字要害あり。或は以て城ノ台の物見台趾とし、或は別城と為す。一孤丘にして、椎名氏其下に居る。」と記している。城跡周辺には、山麓集落としての「宿」が形成され、舟運の拠点とみられる「舟戸」が存在する。また、城跡南側に展開する「上ノ町」「東前」「西前」「南前」の耕地は、領主の手作地である「門田」「前田」の跡と推定され、史料中の「中内屋敷」等に付属したものであろう。さらに「宿」の域内には、匝瑳椎名党と由緒深い「熊野権現」が鎮座、近傍には日蓮宗弘経寺・真言宗宝満寺などの寺院も存在していた。

さて、今般の発掘調査において、「城山遺跡」は15世紀末をもって終焉、しかも整然とした計画的廃棄であったことが判明した。この調査成果から推して、15世紀の末期、遅くとも16世紀初頭の時点において、「本郷」内部における城館の移動があったことが推測される。すなわち、在地情況の推移とともに、「篠本郷」領主の居館地は、篠本城から寒風城へと移動したものであろう。さらに、戦国時代最終末の16世紀後半、「新田」集落の形成とともに、その支配拠点として要害台城が構築されたものと思料される。

《引用・参考文献》

註1　『千葉県埋蔵文化財分布地図〈2〉』　千葉県文化財センター・1986

註2　伊藤一男他『下総国匝瑳郡内山城跡調査報告書』　千葉県企業庁・1975

註3　永原慶二氏「中世東国の新田と検注」　『金沢文庫研究』99号

註4　野口実氏「下総国匝瑳南条庄地頭椎名氏について」　『史友』第9号　1977

註5　『光町史』現代編506頁　光町役場・1983

註6　木村修氏「内藤泰夫氏所蔵『千葉氏の高野山宿坊関係文書』について」　『成田市史研究』第8号　1983

註7　小笠原長和氏「建武期の千葉氏と下総千田荘」　『史観』第65・66・67合冊　1962

註8　遠山成一氏「室町前期における下総千葉氏の権力構造についての一考察」　『千葉史学』16号　1990

註9　滝川恒昭氏「小弓公方家臣・上総逸見氏について」　『中世房総』6号　1992

註10　川村優氏「総州代官関口作左衛門処罰の背景」　『房総の郷土史』12号

註11　『千葉県香取郡誌』　香取郡役所・1921

【篠本城跡・椎名氏関係史料出典一覧】

1　「千葉県史料」中世篇・県外文書

2　「改訂房総叢書」第五輯

3・13・14　「八日市場市史」上巻・資料編

4・8・11　「千葉県史料」中世篇・諸家文書

5・10　国立公文書館内閣文庫所蔵文書

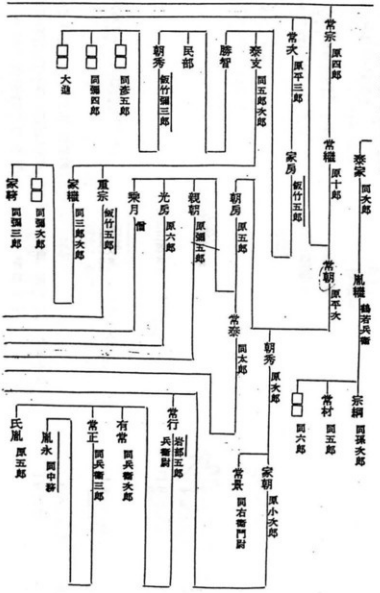
6・9・12　「旭市史」第3巻・中世史料編

7　「横芝町史資料集」中世史料編

1 氏名未詳書状（金沢文庫文書）

此間無便宜、不令申入候之條、」恐入候、
抑千田孫太郎殿、子息瀧楠」殿、千葉介殿と一味同心、」可落大嶋之由、依被申」下候、竹元と岩部中務」
□定合力仕候、竹元も」去月廿一日大原へ付候て、」國中軍勢を集候、雖然候、」けはしき合戦は未遂候、

2「神代本千葉系図」



篠本城跡・椎名氏関係史料1

3 香取社造営料足納帳（「香取文書纂」）

香取御造営料足事。拾四箇年分。可致催促由。被仰間。応永十三年丙戌□月日。以三切符相触候内。納帳。

十一月十日
弐貫九十六文 応永五年寅 応永六年己卯両年分

匝瑳方状有（方状ハ北条ナルヘシ）内勘解由入道 村山ヘ

三百七十五文　中村三郎さゑもん跡 上様分

四百文　未請取出三谷蔵人殿

一円城寺源内左衛門殿分

牛尾。田数四反 分銭参百文之内 百五十文納

一木内五郎左衛門入道殿分

三年半分
大原。田数六反 分銭百五十文之内 半分

一円城寺将監入道殿分

高津原。田数七町八反三百三十分 壬申発酉両年分 半分ヲ 弐貫九百七十三文納

一三谷孫六殿分

亀崎。田数一町七反廿五歩 丁丑戊寅両年分 壬申発酉両年分 内半分四百廿七文納

同人

牛尾。田数三反半 壬申発酉二年分 半分百八十八文納

一原殿分

牛尾。田数三町五反 壬申発酉二年分、内八百七十五文半分納

一竹元六郎殿分

竹元。田数一町二反大。 卅五歩 分銭百六十六文内 四百八十文納

一三谷弾正知行分　応永十四二月廿三日

応永十四二月日

大原郷内飯篠分。甲申乙酉両年分。合五百文内。二百五十文納

4 姓未詳勝信知行充行状写（神保誠家文書）

竹元青見原半分其方ニ相任候、并柴崎事、備前ニ可相任候、為後日一筆如件、

天文四年

十二月廿日勝信（花押影）

井田刑部大輔殿

花押影1（勝信）

5 姓未詳常真判物（上総逸見文書）

山室前相違候者、一色成就森」可進候、就御所望、山室一跡之地」之事進置候處、不可有」相違候之、仍以前如申、井田」致忠信候者、相当之所可進」之事御心得尤候、一筆」如件、

天文拾八年配

八月十六日　常真（花押影）

逸見左京亮殿

花押影2（常真）

6 椎名勝定書状写（「下総旧事」）

篠本之郷新善光寺之事、尊譽法印如御代、西光寺照源法印江任置申候、門中之旁ゝ不可有別條、爲後日一札如件

天文八年五月廿七日　椎名伊勢入道

勝定　花押

西光寺

7 宗龍寺過去帳抄

・宗龍寺殿千葉玉勝大居士
享祿二丙酉年八月九日行才五十八
千方民部大夫□(大夫)勝
・千方院殿昌外全機大姉
天文八辰年八月廿三日行才三十九
因田氏娘秀勝母

8 千葉胤富判物写（神保誠家文書）

椎名右衛門大夫・三谷小四郎、其外兩人之同名之中、
此度馬寄ニ被渡候之上、於末代不可有御違變候、万一
此面々、致無沙汰候者、美濃守同前ニ口惜之由、可被
仰付之旨、如件、
八月六日　胤富判⊙
井田美濃守殿

9 椎名康胤書状写（「下総旧事」）

○篠本村椎名源之丞ト云家アリ、其家所藏ニ
尊翰令拜見候、如仰、其春景虎至小田原進發、依之中途御出陳雖
成路次不合得故、無御參陣段不及是非候、御進退之儀、正木大膳
亮申理候之處、正大無疎意旨返答之儀、御知行方者不入御手之
由、無御心元存候、正木十郎方當地在留之事候間、御存分之通可
申望候、於拙者、無如在候、近日可令歸國之間、公邊之御用等於
有之者承、不可有索心候、毎事猶期後音之時候、恐々謹言
五月八日　椎名右衛門太夫
康胤（花押影）
椎名神九郎殿
椎名神五郎殿
御報

10 千葉胤富書状写（楓本井田文書）

此度忠信付而　匝瑳面之一跡之事　（不）致無忠人之透（通）
被任申状如件
永祿三年
十二月十六日　胤富（花押影）
井田美濃守殿

11「領知目録（神保誠家文書）

十二貫　木つみ（八日市場市木流）
八　貫　久　方（八日市場市久方）
八　貫　山くわ（八日市場市山路）
八　貫　谷　中（八日市場市中野・下中野）
弐貫　とみ下（八日市市）
六貫　具塚一原（八日市市具塚・市野原）
弐貫　あらる（八日市市）
弐貫　中さわ

12千葉邦胤官途状写（「下総旧事」）

官途

天正貳年閏十一月廿四日　　邦胤　花押

椎名左馬允殿

13「椎名氏歴代譜」（椎名惣治郎家文書）

(1)西光寺旧記ニ云大檀主椎名家ハ飯倉、米倉、屋敷、木戸四箇所、領主初飯倉洗関台ニ在城ス、其後、米倉等明寺台ニ移り、又飯倉陣屋ニ居住ス。西光寺法流開基ハ応永卅四丁未年也。人皇百二代称光天皇御宇時将軍ハ足利四代義持公ト云云

・真乗院殿法徳蓮義大居士　椎名伊勢守胤元応永廿三丙申月日不詳
・東光院殿法明蓮胤大居士　椎名伊勢守胤家徳四壬子八月十六日
・西光院殿法楽蓮済大居士　椎名伊勢守胤景康正二丙子七月四日
・大徳院殿法量蓮心大居士　椎名伊勢守胤清文明十八丙午二月八日
・白蓮院殿法誉蓮義大居士　椎名伊勢入道胤定享禄四辛卯六月廿九日
・清池院殿法岸蓮如大居士　椎名兵部大輔胤定永禄二己未七月十日
・正覚院殿法泰蓮慶大禅門　椎名左馬允胤光天正十三乙酉正月十七日
・安養院浄本蓮敬禅定門（胤光）　椎名惣五郎胤通元和八壬戌十月廿四日

(2)椎名家元ノ在城ハ飯倉仙元台（胤光）也、其後、米倉城之台ニ在城ス。亦其後、飯倉陣屋ニ居住ス。家之紋、九曜、又九ニ亀甲。匠瑛、垂上ノ郡司也。太田宗蔵寺、船木東光寺、両寺大檀主也。平胤長八辺真福寺開基、椎名惣五郎胤通之位牌ニ也。

（中央地区米倉　椎名惣治郎家所蔵）

14「押田家譜」抄（押田淳家文書）

一某――昌定、与次郎、近江守　天文四年相続
千葉介昌胤利胤胤富を主として仕える
八日市場、横須賀城主

一胤定――下野守、法名常蓮、墓は円長寺　永禄九年相続
八日市場城にて生る
千葉介利胤、胤富、邦胤三代に仕える
後北条氏に属し部将として小田原湯本口で戦う

一吉正――与一郎、藤右衛門
母は海上五郎大夫の娘、妻は井田因幡守時秀の娘

篠本城の焼物が語ること

小野正敏

1　はじめに

今回の篠本城の発掘調査で、たくさんの陶磁器が採集された。この資料だけで語れることが全てではないが、これらの陶磁器は、歴史資料としてこの篠本城や房総の歴史をあきらかにする多くの情報を持っている。

・陶磁器の分析のふたつの視点；

型式（タイプ）；誰が、どこで、いつ作ったか→生産地の概念

組成（アセンブレッジ）；誰が、どう使ったか→消費地の概念

・消費地である篠本城の陶磁器を２つの視点を使うことで、歴史像を描くことができると考えている。でも残念なことに遺跡から発見される遺物は、当時の人が使っていた道具の全てではなく、その素材も焼き物、木製品や、石製品、金属製品など様々なものによって生活は支えられていた。その限定された資料から考えてみる。

2　篠本城から出土した陶磁器の時代と生産地

1）３つの陶磁器群（図６）

Aのグループ；墓地の時代（１３～１４世紀前葉）およそ鎌倉時代

Bのグループ；最盛期（１４世紀末～１５世紀後葉）およそ室町時代

Cのグループ；衰退？の時代（１５世紀末～１６世紀前葉）およそ戦国時代

・Aの時代の生活空間はどこにあったのか。

・Bの時代にどんな生活があったのか。

・Cの時代はなぜ陶磁器が少なくなったのか。

・AとCの関係をどう考えるのか。

2）陶磁器の生産地；図２

3　組成と機能分担（図３から９）

・日常生活の必須機能の道具（什器・調理煮炊具・貯蔵具）が主体

城館型ではない？→ステイタスシンボル的な美術陶磁が少ない

城の構造に求心性が弱いことと関連か

遺物の平面分布の検証が必要

笹子城の染付の意味

都市的でもない？　量は多い（東国にしては）

→都市と村の消費の違い

縁釉小皿の使用痕とC グループの減少

・城の陶磁器と村の陶磁器、都市の陶磁器
　篠本城の陶磁器は城の様相なのだろうか、村の様相なのだろうか。

4　篠本城の陶磁器の位置づけ

1）１５世紀の時代性

・中国陶磁；青磁の時代から染付の時代への過渡期
　　瀬戸美濃と中国陶磁の逆転関係⇒海禁と琉球
・瀬戸美濃；窖窯から大窯への生産構造の変化、器種構成の変化
・在地窯；土器生産の拡大、内耳鍋、土釜、擂鉢などの器種の多様化

2）東国では、この時期の陶磁器を出土する遺跡が増える。

・１５世紀になると城館が日常居住型になる→笹子城、小林城
・物流の活性化、量の拡大？

5　これからの課題

参考にした文献等
山武考古学研究所1984「一宮城跡城之内遺跡」
木更津市教育委員会1984「真理谷城跡」
千葉県教育委員会1974「上総国大多喜城本丸跡発掘調査概報」
中野遺跡調査団1986「下総国四街道地域の遺跡調査報告」
福島県川俣町教育委員会1994「河股城跡発掘調査報告書Ⅱ」
千葉県文化財センター1994「印西町小林城跡」
津田芳男1991「岩川遺跡（館跡）」千葉史学18号
石川県立埋蔵文化財センター1984「普正寺遺跡」
西山真理子1994「南陸奥の焼物は何を語るか」福島考古35号

図1　焼物と他の素材

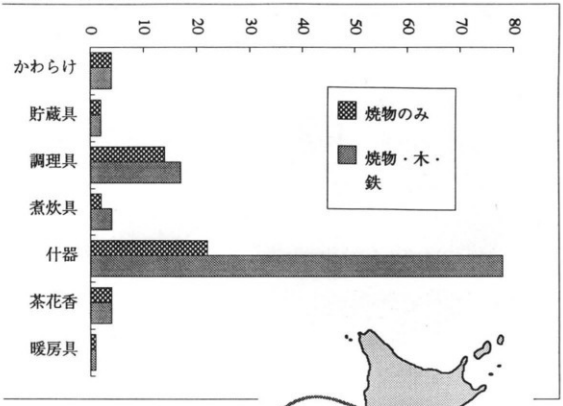


図2　関係した遺跡と生産地

図3　篠本城出土の陶磁器組成

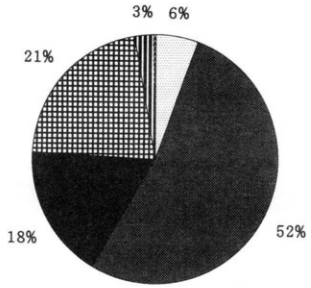


図4　１５世紀を中心にした比較１

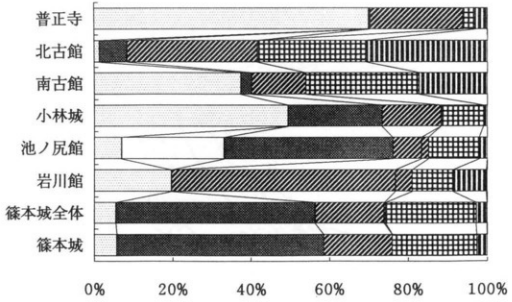


図5　１５世紀を中心にした比較２

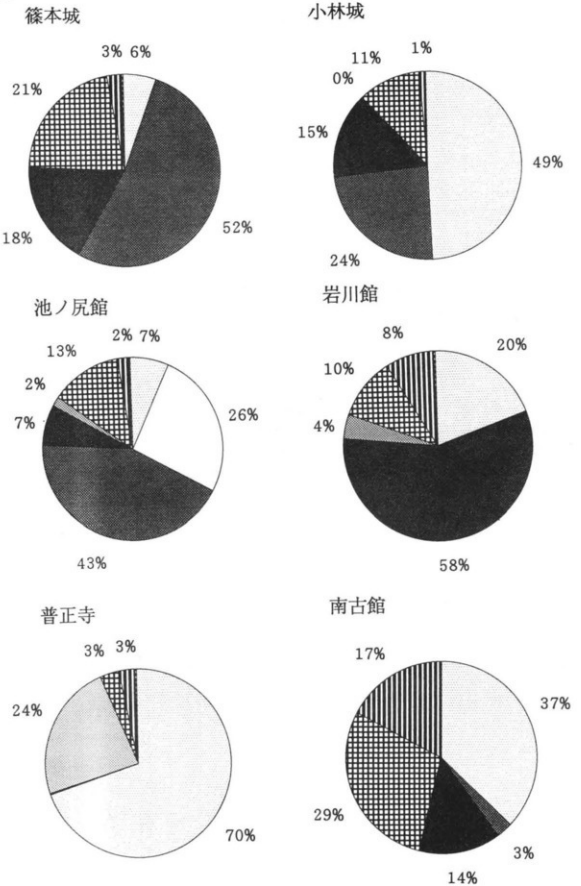


図6　篠本Bグループ相当陶磁器群

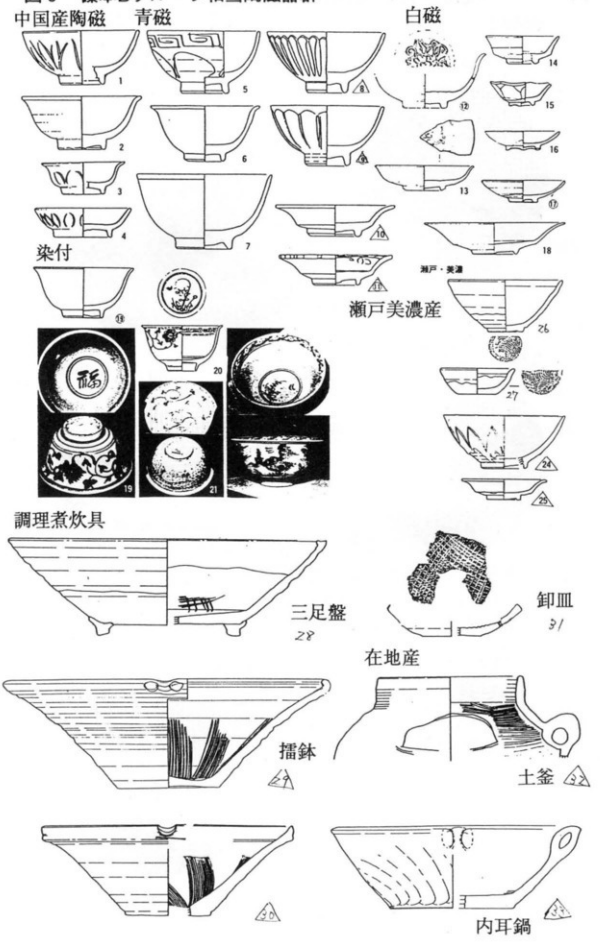


図7　15世紀後半からの碗皿

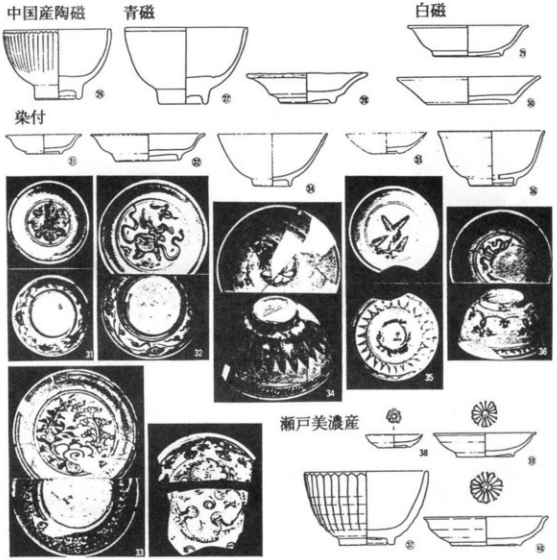
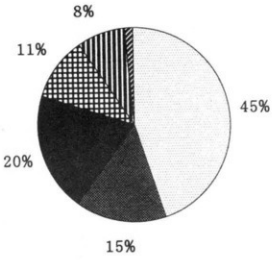
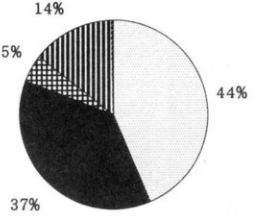


図８　１６世紀を主とする城館の陶磁組成

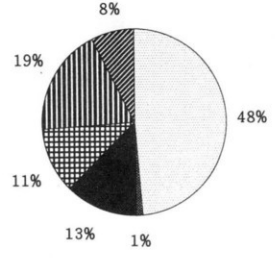
臼井城



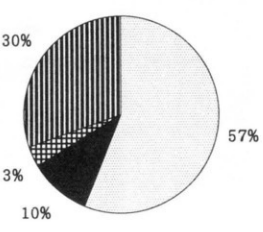
一宮城



大多喜城



真理谷城



房総１６世紀比較

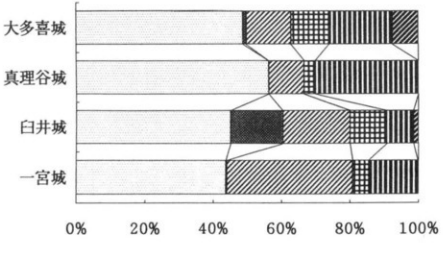
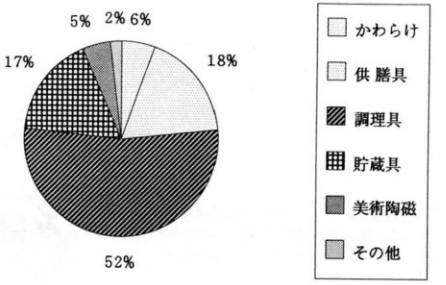
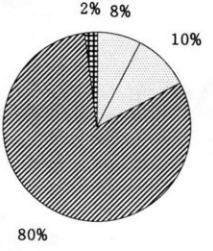


図９　篠本城出土陶磁器の機能別組成

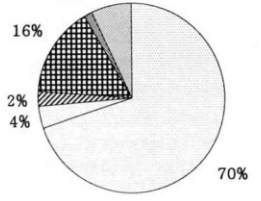
篠本城機能別



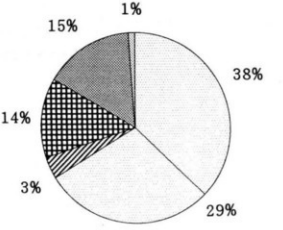
池ノ尻館機能別



普正寺機能別



南古館機能別



ありし日の中世松本郷

東総の中世城郭

椎名幸一

1　位置と歴史的環境

東総地方は千葉県の東部に位置し、太平洋に面した地域で海上郡・匝瑳郡の二郡からなる。地形は下総台地の東端から東西に延びた標高30～40mの台地と、太平洋に沿った帯状の平野部からなり、台地縁辺部・先端部または平野の砂丘列に城館跡が存在する。当地区の北側台地は香取郡に接し、西部を流れる栗山川が山武郡との境になっている。

歴史的には、平安時代後期から平忠常の子孫の一族が開発領主として成長し、平安末期に片岡常春の領する三崎荘、匝瑳氏・椎名氏の匝瑳北条・南条荘が見え、それぞれ小領主として常陸の佐竹氏との関連が窺える。しかし、鎌倉幕府の創設により佐竹氏は北総より撤退し、三崎荘には千葉常胤の子東胤頼の系統が入部して海上氏を名のり、戦国後期には中島城を本拠とした。そして、匝瑳南条荘には後北条氏との関係の深い井田氏の勢力がこの地まで浸透し、椎名氏・三谷氏はその被官として存続した。

2　在地小領主の城

「日本城郭大系」によると東総地区には48の城が載せられているが、平成３年に行われた千葉県の調査では64城を確認することができた。この中には珍しい例として、直接海に面した刑部岬上にあったため、長い年月の間に、波の侵食をうけて消滅してしまった佐貫城も含まれる。海上郡・匝瑳郡内とも保存状態のよい城が多い中、後世の開発等により姿を変えてしまった城もある。

海上氏の本拠であった中島城は、全面耕作地であるが、城内を区画する空堀も残り、また周囲は東総では珍しく岩盤をほぼ垂直に削り込み、要害性を高めた遺構もみられる。この城のように岩盤を利用した城は海上郡内では、見広城・八木城などがある。

旭市内の城は平野部にあり、砂丘列上に築かれた城が大半である。近年の造成工事により、虎口に枡形構造をもつ後藤城は、周囲の土塁も合わせほぼ完全に破壊されてしまった。網戸城も東側一部分のみ宅造により空堀が消えた。同様にこの他の城も少なからず遺構が失われている。これに対して、栗山川流域の匝瑳郡の城は、よく遺構の残された城が多い。この地域は城館が密集しており、一村一城のような状態で分布している。椎名氏の本拠、飯倉城の北部に三谷氏の新村城が残る。独立丘上に空堀・土塁が完存している。主郭前面には馬出しや土橋も見られ、戦国盛期に機能していたことが窺える。

3　戦国期の城

匝瑳郡では、坂田井田氏の被官三谷氏が築いた新村城が、郡内で異彩を放っている。椎名氏の関連した城のほとんどは直線連郭を基本としたパターンであるが、新村城は馬出しや、横堀も回しており、後北条氏の関連した人物による築城ではないかと思われていた。匝瑳北条荘に対した椎名氏の大浦城も異質な縄張りをもち、近年その全容が明らかになった篠本城も当初は、そのような考え

もあったが、周辺に近似した縄張りが確認されたため、後北条氏とのかかわりとは別に、この地方独特な縄張りがあったのかも知れない。

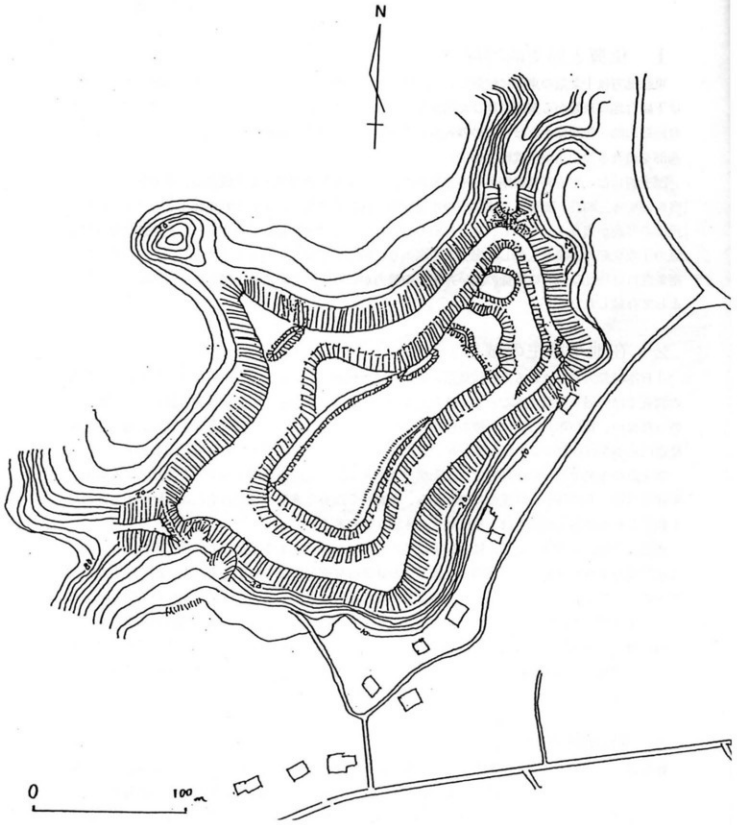


図1　光町虫生　古城要図（縮尺：1／2,500）

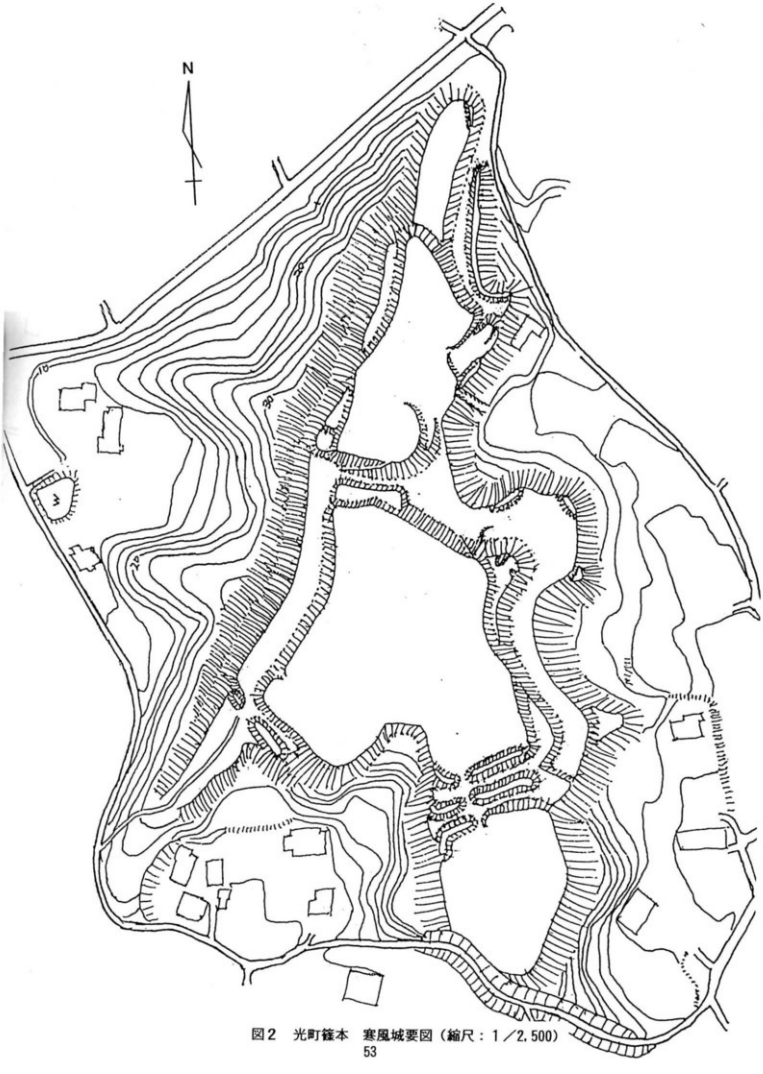


図2　光町鎌本　寒風城要図（縮尺：1／2,500）

図3　光町虫生　田中砦要図（縮尺：1／2,500）

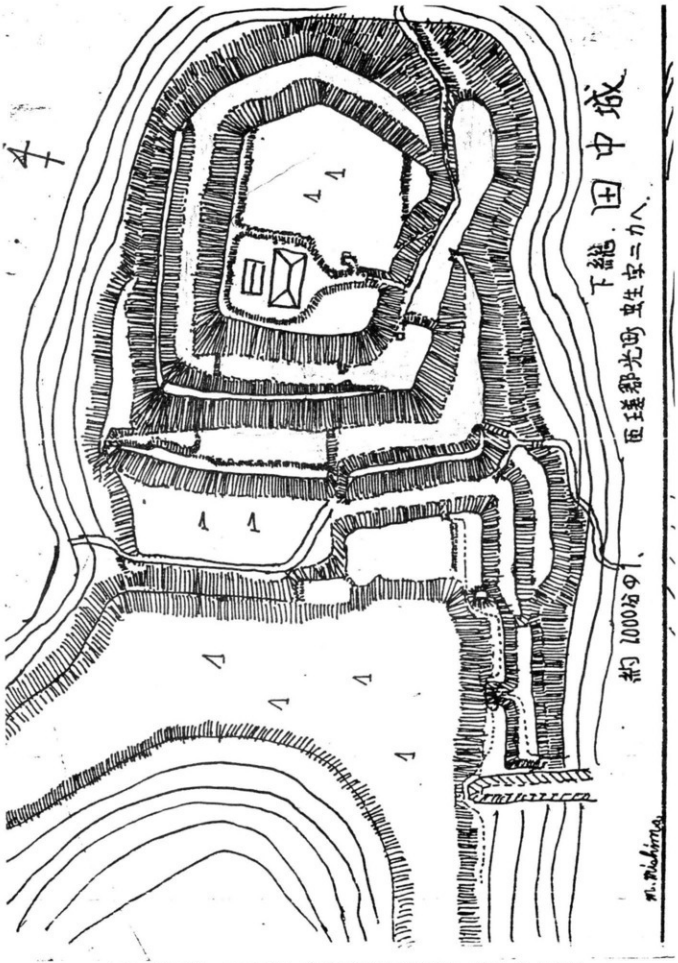


図4　光町虫生　田中砦要図（作図 三島政之 昭和46年、縮尺：1／1,000）

図5　光町小田部　小田部城要図（縮尺：1／2,500）

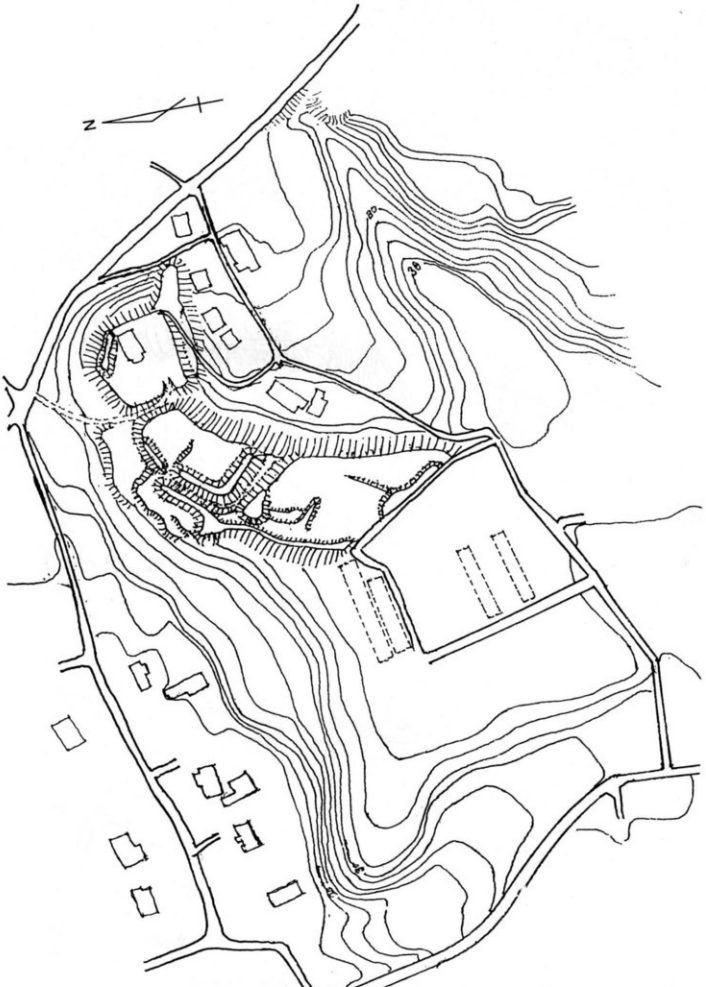


図6　光町小川台　岩室砦要図（縮尺：1／2,500）

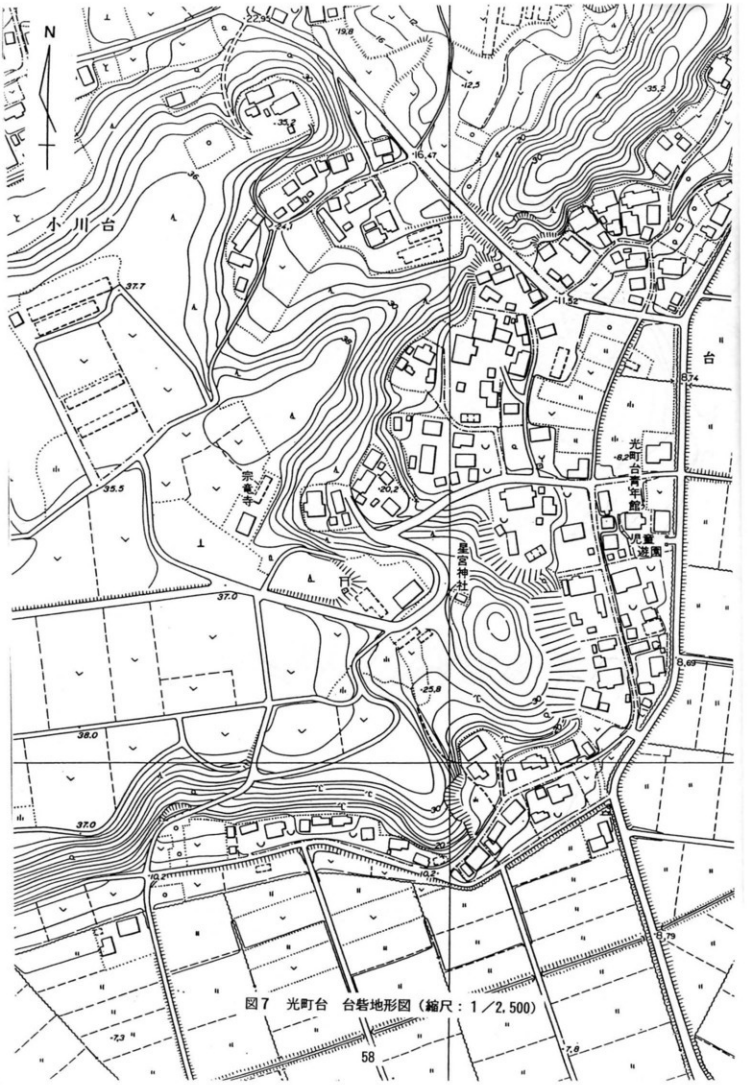


図7　光町台　台砦地形図（縮尺：1／2,500）

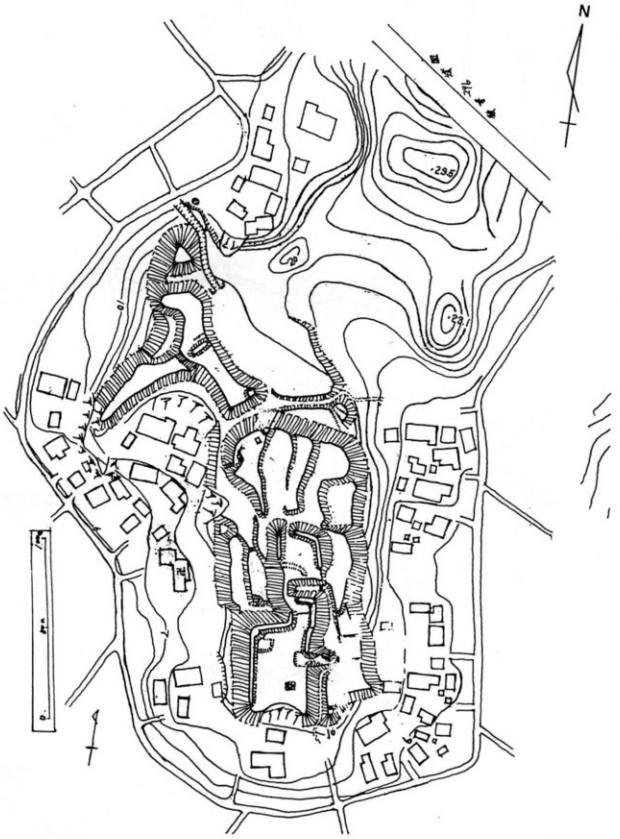


図8　八日市場市新　新村城要図（縮尺：1／2,500）

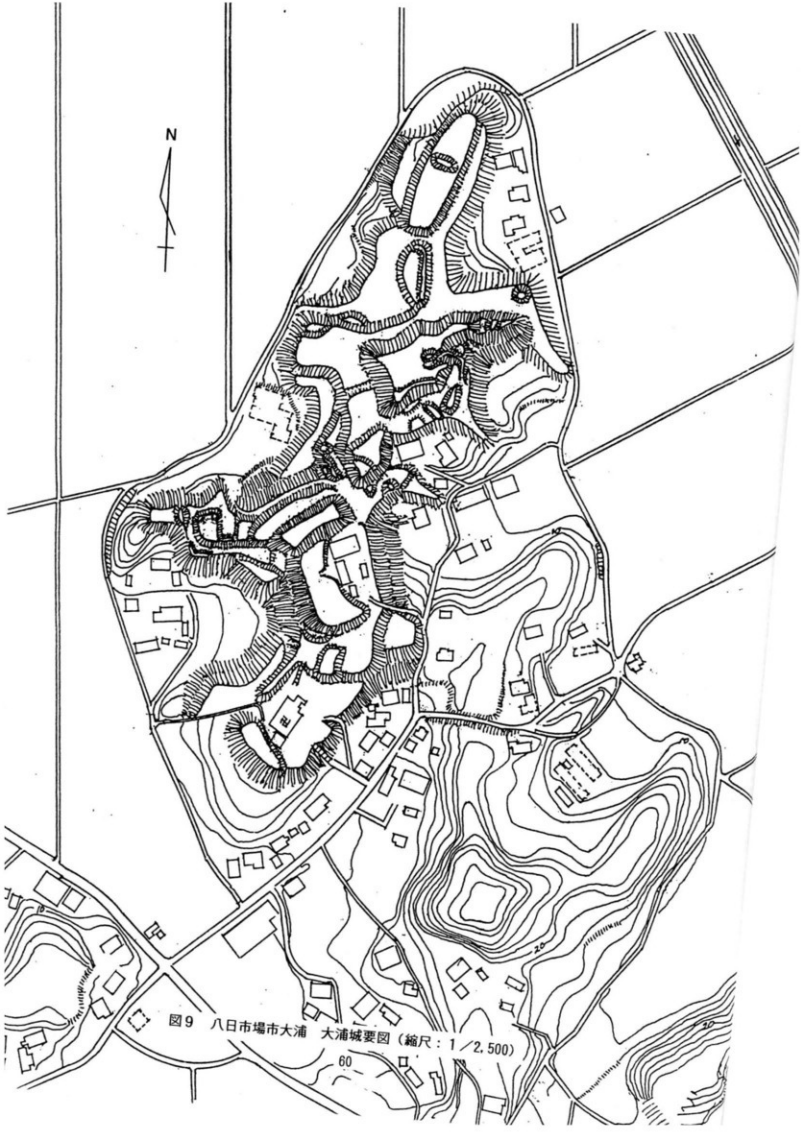


図9　八日市場市大浦　大浦城要図（縮尺：1／2,500）

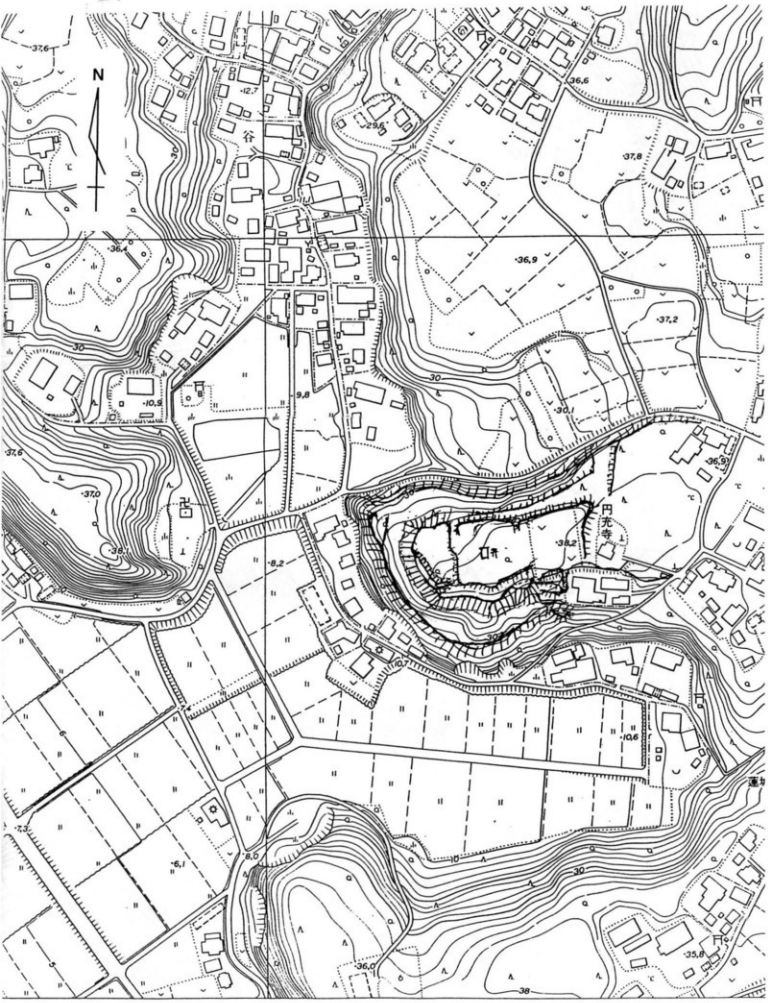


図10　八日市場市吉田　吉田城要図（縮尺：1／2,500）

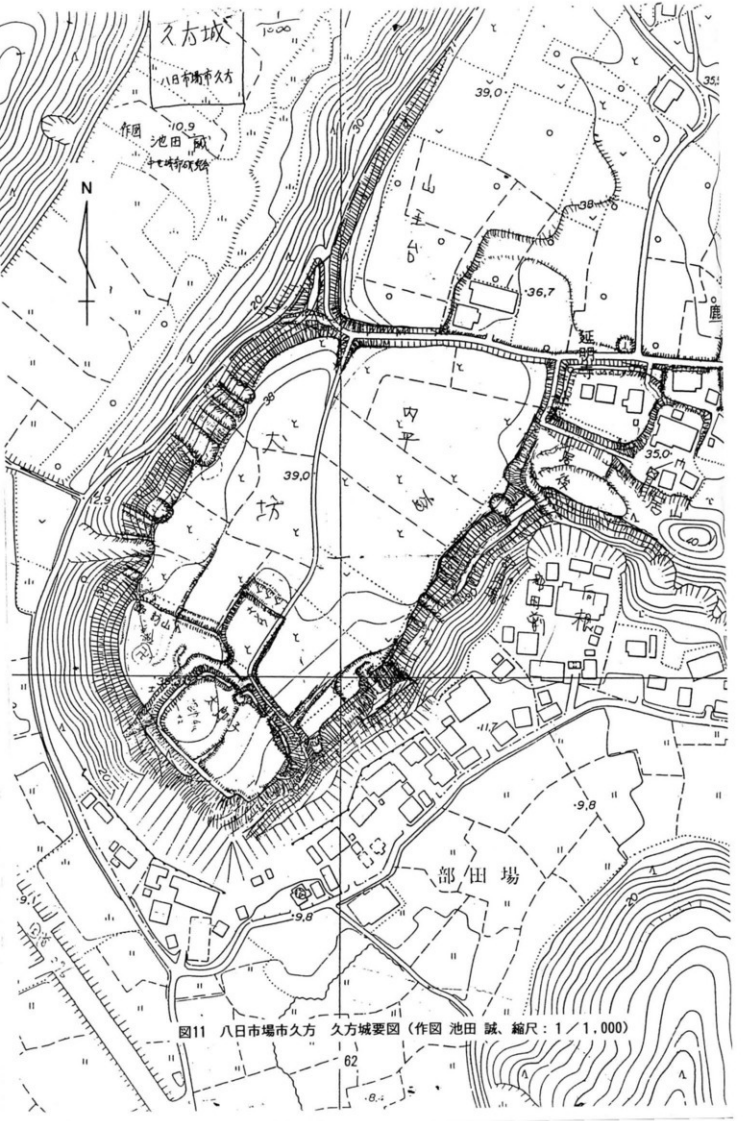


図11　八日市場市久方　久方城要図（作図 池田 誠、縮尺：1／1,000）

図12　八日市場市木積　田久保砦地形図（縮尺：1／2,500）

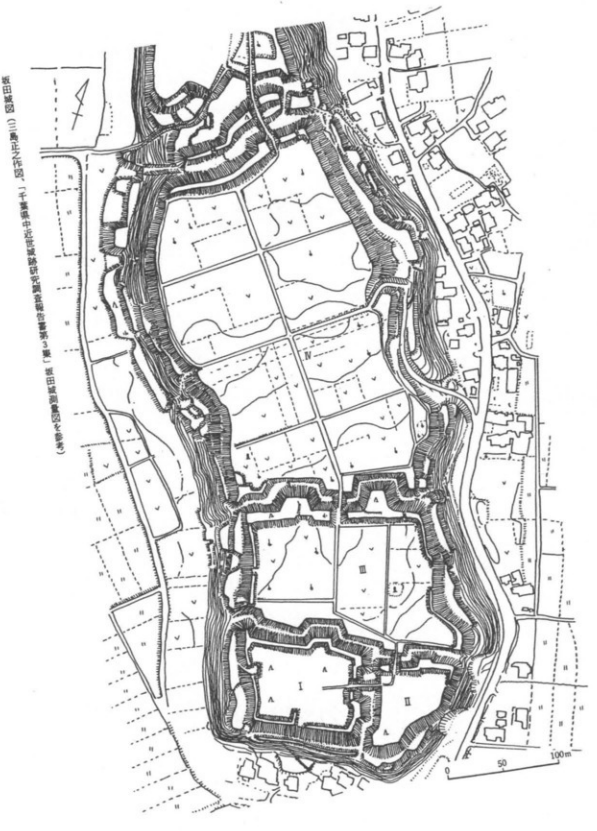


図13　横芝町坂田　坂田城要図（縮尺：1／3,500）

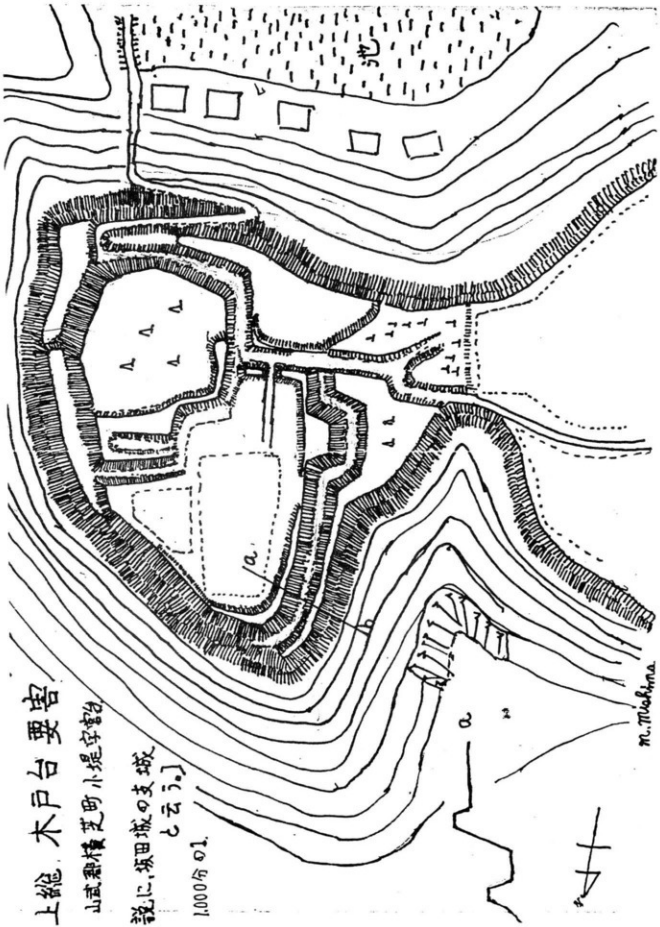


図14　横芝町小堤　小堤城要図（作図 三島政之 昭和46年、縮尺：1／1,000）

図15　旭市江ヶ崎　江ヶ崎砦要図（縮尺：1／2,500）

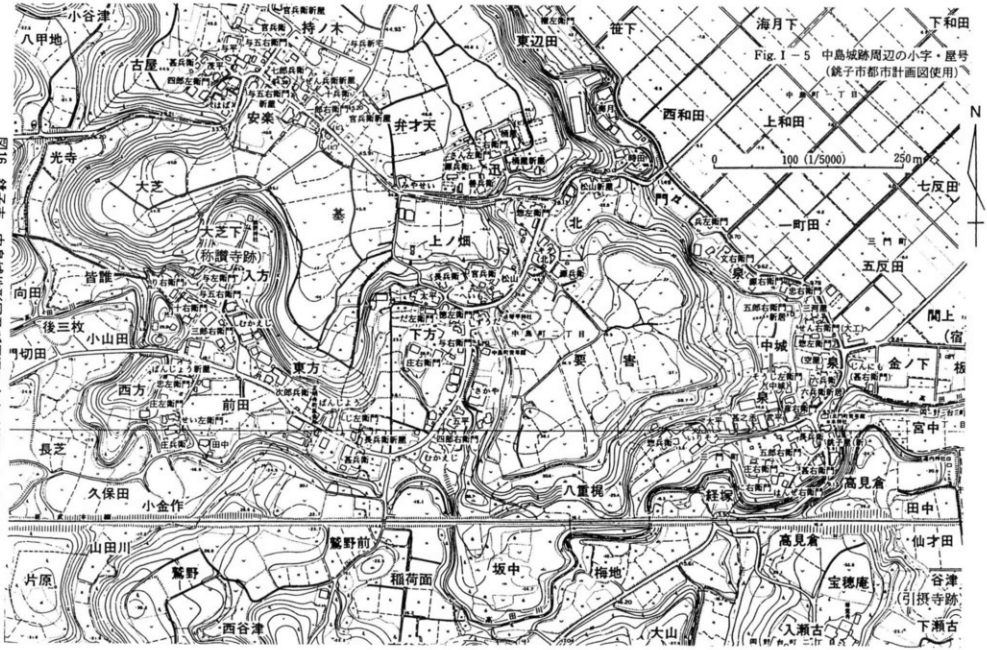


Fig. I－5　中島城跡周辺の小字・屋号
(銚子市都市計画図使用)

図16　銚子市　中島城地形図及び周辺の小字(縮尺：1／5,000)

サシバ

ギンラン・キンラン

考古学からみた房総の中世城館の構造

柴田龍司

はじめに

千葉県内では、いままでに200例以上の中世城館跡の発掘調査が実施されてきた。おそらく発掘件数は全国一であろう。しかし、特に千葉県に限らないことであるが、近年（1970年代）までは城館跡の発掘と言えば、堀の幅や深さ、土塁の積み方を調べれば良しとした調査方法が主流であった。また、城館跡は遺跡の範囲からみると大規模遺跡となるため、発掘調査はどうしても城館の一部を対象とするものが大部分であった。このため、城館跡の発掘件数が多い割には歴史資料の蓄積化がなされたとは言いがたい状況であった。

しかし、80年代後半に入ると中世城館研究の水準が上がるとともに、大規模開発に伴い城館跡全域を対象とする発掘調査が実施されるようになり、それらの発掘成果をもとに考古学による城館研究は急速な進展を歩みはじめた。

以上のような、ここ10年程の間に急速に蓄積されだした発掘成果に基づいて、本発表では千葉県内の中世城館の構造が中世（鎌倉時代から戦国時代までの約400年間）を通してどのように変遷したのか、また篠本城跡の発掘成果がその中でどのように位置づけられるかを考えてみたい。

1　鎌倉時代～南北朝時代（13世紀～14世紀）

この時期の城館跡は台地上や丘陵上では現在までに発見されていない。ただし、文書史料の上では既に確認することができるので、存在したとしても、①城そのものが少ないため発掘調査の対象になっていない、②戦国時代に大きく改築され当時の構造を残していない、③この時期の城郭は簡単な造りのため発掘調査で確認できない、等の理由から判明しないものと考えられる。

逆に河岸段丘や自然堤防などの平野部では、完全に城郭化してはいないが、ある程度の防御性をもった堀で囲まれた館跡がいくつか発見されている（外箕輪遺跡・君津市、下ノ坊遺跡・安房郡鋸南町、岩川遺跡・長生郡長南町、菅生遺跡・木更津市）

これら平野部で発見された館跡は、13世紀代と14世紀代では構造は異なっていたようで、例えば13世紀代が主体の外箕輪遺跡は、堀というよりは溝で区画され、しかも方形に四辺を囲むに至っていない。まだ防御力がある館といえる構造ではない。14世紀に入ると下ノ坊遺跡や岩川遺跡で認められるように、堀でしっかりと区画された方形プランの館が明確に捉えられる。この方形プランの館は単独のタイプが多いと思われるが、岩川遺跡のように方形館の集合体となるタイプも存在する。方形館の集合体タイプは全国各地で発見されだしているが、政治的な拠点に多く認められることから、地域の政治状況を考える上で重要な資料となる可能性がある。

平野部で発見された館跡は、それ以後の城館と比べると事例は極めて少ないが、共通する点は何れも15世紀中葉を中心とした時期に廃絶してしまい、戦国時代には継続しないことである。台地や丘陵上に立地する城館が逆に15世紀中葉に登場することから、館の多くは平地から要害性のある台地や丘陵に移転したことが推測される。おそらく直接の契機は戦乱の激化であろうが、背後には村落の解体・再編成が基盤になっているものと考えられる。

2　室町時代～戦国時代前半（15世紀～16世紀前半）

平野部に立地する城館が廃絶するころ（15世紀中葉を中心とした時期）、逆に丘陵や台地上に堀や土塁で区画された防御性の強い城館が築き始められる。

この段階の城館は、構造や規模からみると大きく２つのタイプに分けられる。第１のタイプは、基本的には堀と土塁で区画された郭は単郭で、方形プランをなす。郭内は溝や段差で空間は二分されるが、核となる建物は一群である。郭内には建物、井戸、土坑や地下式坑から構成される墓域がセットで検出される。出土遺物は、極めて少量の事例もあるが概して小規模な割には豊富な事例が多い。また、立地をみると台地の中央部や谷津奥の台地縁に限定され、いまのところ台地先端部に立地する事例は認められない。第２のタイプや戦国期後半の城館が何れも台地先端部まで城域に取り込んでいる事例が圧倒的なことを考えると、第１のタイプの立地上の特色はかなり異質といえる。

検出事例としては、池ノ尻館跡（四街道市）、埴谷周路遺跡（山武郡山武町）、南屋敷遺跡（千葉市）の３例、発掘は実施されてはいないが現状の遺構からみて確実な事例として高谷館跡（袖ケ浦市）がある。発掘された３事例で、池ノ尻館跡と埴谷周路遺跡は館内部のみの調査であったが、南屋敷遺跡は館の外部も広範囲に調査された結果、館の外には中世遺構が全く検出されず、館だけが孤立して構えられていたことが明らかとなった。

このタイプの城館の性格としては、①集落とは離れて立地する。②見通しのきく台地先端部には立地しない。③遺物量からみて居住性の高い城館であった可能性がある。④墓域を伴う。⑤郭内は機能的に二分される。⑥郭内の一辺が30～40ｍで小規模、などの特色から、わずかな家人を従属させた末端の在地土豪層が想定される。そして、近隣の集落との結び付きは極めてゆるやかであったと思われる。ただ、このタイプの城館主が何を生産基盤としていたかは今後の検討課題といえる。

次に第２のタイプとして、篠本城跡と笹子城跡（木更津市）の事例が上げられる。子のタイプの城館は、堀や土塁、切岸で区画された複数の郭（篠本城は５郭、笹子城は３郭以上）と、斜面部に造り出された多数の腰曲輪から構成される。第１のタイプに比べると規模的に格段の違いがある。城館の内部は、無数の建物、土坑、溝などが隙間なく検出され、しかも出土遺物も多量に認められることから、城内では長期間にわたって日常生活が営まれていたことがわかる。また、五輪塔や宝篋印塔が多数出土していることから、城内には石塔が立つ墓域が設定されていた。

もう一つこのタイプで重要なことは、城館の対岸にある台地・丘陵上にも、城館と同時期の屋敷地と考えられる遺跡が伴うことである。篠本城には神山谷遺跡、笹子城には犬成遺跡が、それぞれ斜面中段に腰曲輪状の平坦面を多数造り出している。一つ一つの平坦面が一つの屋敷地とすれば、城館を取り囲むように屋敷が群在していた状況が読み取れる。ただ、各々の屋敷は堀や土塁で区画されているわけではないので、防御性は全くない。このため、防御力のある城館内に住める人々と防御力のない屋敷に住む人々に必然的に分けられる。

第２のタイプの性格としては、城館内で居住域と墓域がセットで捉えられ、さらに城館外の隣接地にも居住域が認められることから、城館を核とした中世集落の一形態とみることができる。　第１、第２のタイプとも、築かれる時期は15世紀中葉を中心とした年代であるが、ここで取り上げた事例では、早い事例だと15世紀後葉、遅くて16世紀中葉までには廃絶し、戦国時代後半までは継続しない。

3　戦国時代後半（16世紀中葉～16世紀後葉）

15世紀中葉以降に房総各地の給料や台地上に雨後の筍のように築かれた城館は、15世紀後葉から16世紀中葉までに廃絶となるものが多かった反面、逆にこの段階から地域を急速に拡大して大規模な城郭に変化するタイプが登場してくる。さらに、大規模城郭の直属の支城が軍事的な目的を主体に築かれ始められる。

戦国時代後半の段階は、房総各地の領主層が前代と比べると格段に在地支配権を高め、広域領主権力を浸透させた時期である。このため、前代と比べると城館のタイプが多様になってくる。

第１のタイプは、和良比堀込城跡（四街道市）に代表されるもので、城館の形態や城館内部の空間構造において、前代の篠本城や笹子城のタイプの系譜を引いた城館である。堀の入れ方や虎口の構造は前代に比べると格段に技巧的にはなっているが、内部は居住域と墓域がセットで捉えられることから、基本的な機能には変化が認められない。ただし、隣接する台地上には屋敷地群は認められないようなので、集落との関係および集落景観は大きく異なっていたと考えられる。このタイプの城館に伴う集落は、よく「根古屋」や「宿」地名が残されている城館の裾部に展開していた。成立した時期は、前代のタイプと同様な頃と思われるが、16世紀中葉以降に大規模な改築を受け防御力が高められている。城館の機能としては、従来からの機能である在地領主層の居城とともに、広域領主権力の居城と最前線の境目城の中継基地の役割を果たしていたものと考えられる。

第２のタイプは、この時代を代表するもので、本佐倉城（印旛郡酒々井町）や臼井城（佐倉市）のような惣構構造の城郭である。このタイプの城郭の特色は、城郭の主郭部については他のタイプの城郭と比べても規模的にあまり大きな差はない。違いがあるのは、外郭部の有無と、外郭内にある支城の存在である。主郭部に隣接する台地を堀や谷津を利用して大きく囲い込み、内部には家臣や商人・職人が住む城下町を形成し、また外郭線（＝惣構）上には支城をいくつか築き、長大な外郭線を防備している。惣構の規模は、城主である広域領主層のレベルに比例するようで、下総内で最大の領主層である千葉氏や原氏のクラスになると、東西・南北が1000m以上となる。惣構の成立時期は、本佐倉城が16世紀前葉まで遡る可能性があるが、だいたいは16世紀中葉遺構である。

第３のタイプは、第２のタイプの外郭線上に築かれた支城や境目城と呼ばれる最前線の城郭である。前者では本佐倉城の支城である長勝寺脇館（酒々井町）や松子城の支城である馬洗城（香取郡大栄町）の事例がある。長勝寺脇館は基本的には単郭構造、馬洗城は５ヵ所の郭から構成され、規模的な違いは大きいが、内部の空間構造は中心部においては極く狭い範囲である。また、出土遺物に目を向けると、前代の城館に比べると量的に激減する傾向がある。激減する理由としては、様々な解釈の仕方があり単純にはいえないが、一つの解釈として前代の城館では内部が日常生活空間であったものが、この段階に入ると城館内に建物を構えるものの、日常生活は別の場所で営んでいたために、結果として遺物量の多寡に反映したと捉えることができる。

後者の境目城には、坂田城（山武郡横芝町）の支城である田向城（山武郡芝山町）の事例がある。５ヵ所の郭からなる中規模な城郭で、近年全面発掘が実施され内部の構造が明らかにされた。それによれば、本丸に相当する郭からは主屋とそれに付属する建物群が検出されたが、他の郭からは若干かあるいは全く検出されなかった。また、遺物量は城跡を全面発掘したにもかかわらず極めて少量であり、城内の日常生活の低さを窺うことができる。

4　篠本城跡の発掘成果の位置付け

ひと口に中世城館跡というが、それは約400年の間に立地、構造、性格が時代とともに変化してきたことが考古学の成果によって明らかになってきた。なかでも、我々が中世城館跡と認定している城館の大部分――千葉県内には現在約1000ヵ所の中世城館跡が認められるが、その内900ヵ所以上――が15世紀中葉以降の、いわゆる戦国時代に機能したものである。

そして、県内の900ヵ所以上の戦国期城館は、我々の住む地域からみれば周囲にいくつかの城館跡を認めることができる。ある城跡は集落の背後にある山にあり、また集落からは離れて「古城」や「城山」と単に呼ばれる城跡もあるが、ほとんどの城館跡は現在まで何らかの形で地元の人々に存在が伝えられている。このことは、実は大変に重要なことで、我々の祖先がいつ頃から現在住んでいる場所に住みついたかを明らかにする上で有力な歴史資料となる。

千葉県内は開発が盛んなこともあって、全国でもトップクラスの発掘件数が近年続き、台地上や平野部の至る所で発掘が実施されている。中世遺跡も城館跡ばかりでなく、集落や墓地・水田等の遺跡も多く検出されている。それらの発掘成果をいせきの立地からみると、台地上では城館跡と墓地跡が主体を占め、平野部では方形プランの館跡と集落跡が主体となり、遺跡の性格によって立地に大きな違いがあることが明らかになってきた。特に集落については、基本的には台地上には認められず、いまのところ自然堤防や河岸段丘上の平野部で検出される事例が多い。そして、検出された中世集落は、平野部に立地する館跡と同様に15世紀代に廃絶し戦国時代には継続しないことが指摘できる。

では、15世紀代に廃絶した集落はどこに移転したかというと、残念ながら考古学ではいまのところ明確に捉えることができない。しかし、消去的手段ではあるが、現在ほとんど発掘調査の手がおよんでいない地区である近世初めから続くいまの集落の下にあることは間違いない。やや極論過ぎる言い方であるが、平野部に散在していた小集落は台地や丘陵の麓に集まってより大きな集落を形成したと考えられる。そして、集落の多くは背後の山に城館を持ち危機に備えたであろう。

以上、中世集落の立地の変遷は、中世城館の立地の変遷と軌を一にしており、集落と城館は基本的には常に一体のものであった。このような変遷の中で、篠本城や笹子城のような城郭そのものが集落であり、しかも隣接する台地・丘陵上にも集落を伴う事例は、①両事例とも16世紀中葉までには廃絶し、現在の集落には継続しない。②両事例のような集落景観（城跡に向かって階段状に集落が形成されるタイプ）は現在見ることができない、ことから、現在の集落景観を形成する前段階の景観であった可能性が高い。

先に発掘調査が実施された笹子城ではまだ予測の段階であったが、篠本城の発掘調査で明確となった集落景観や集落構造は、まずこれからの中世城館跡に対する発掘調査の視点や方法に大きな変化を与えるであろう。また中世史研究の面では、篠本城タイプといえる集落の景観や構造が、村落史研究ばかりでなく在地領主層の構造を解明する上でも鍵となるような、大変重要な歴史資料となることは間違いない。

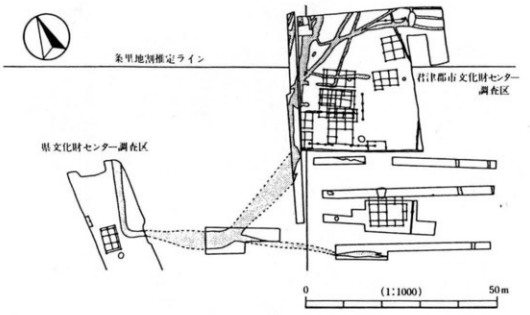


図1　外箕輪遺跡全測図

図2　岩川遺跡全測図（中世のみ）

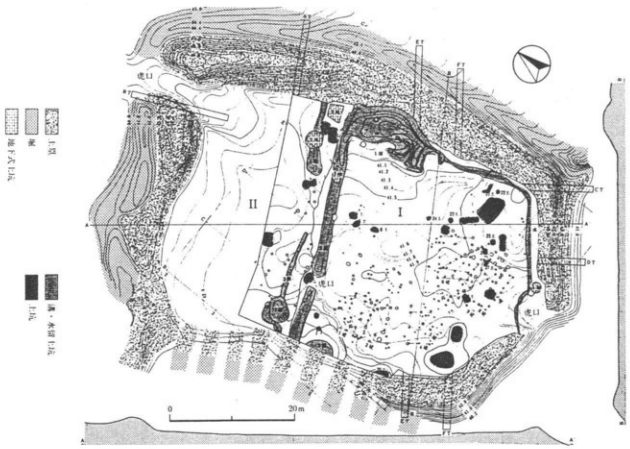


図3　埴谷周路遺跡全測図

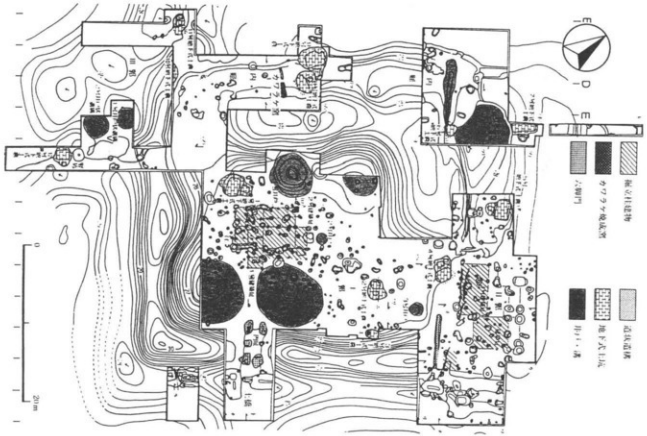


図4　池ノ尻館跡全測図

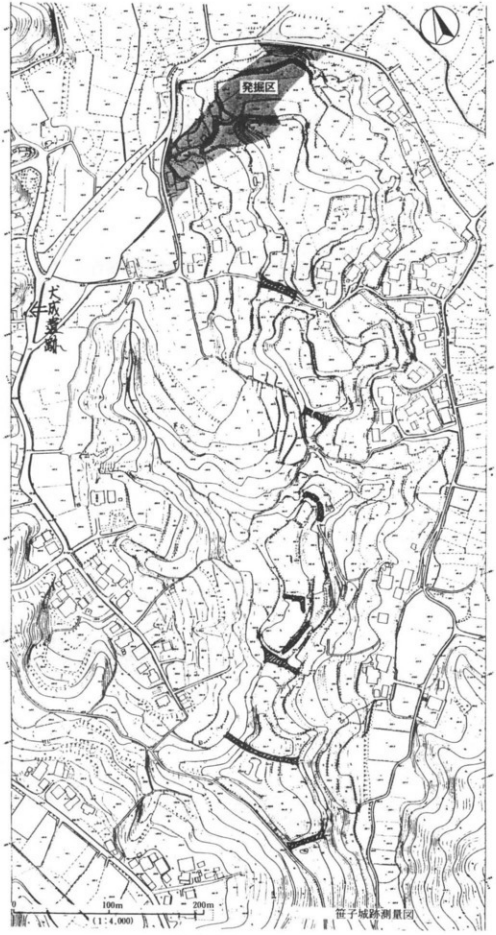


図5　笹子城跡測量図

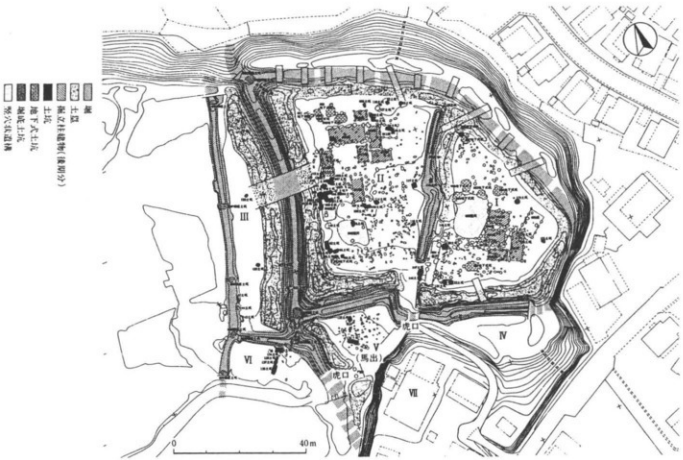


図6　和良比堀込城全測図

図7　馬洗城跡全測図

本佐倉城惣構推定図

図8　本佐倉城惣構推定図

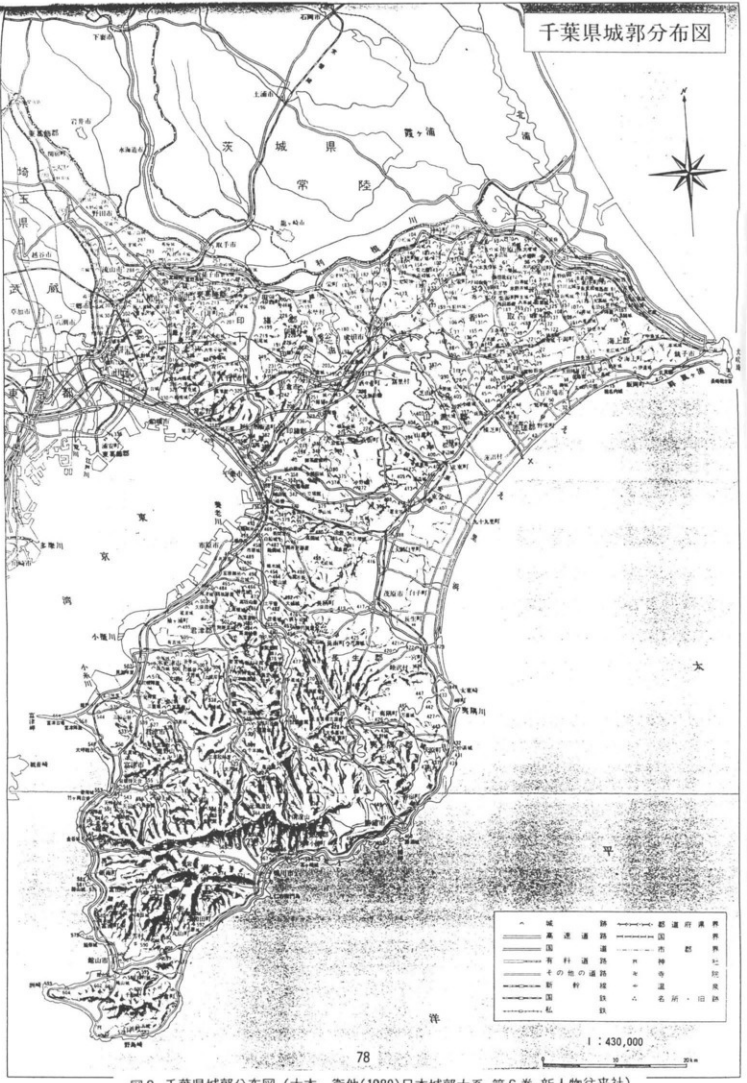


図9 千葉県城郭分布図（大木 衛他(1980)日本城郭大系 第6巻 新人物往来社）

篠本城跡の仏教遺物

橋浦芳朗

篠本城から出土した遺物の中に「板碑」、「宝篋印塔」、「五輪塔」という、いわゆる仏教に関係した物が含まれている。これらの物がどのような物なのか、何を私たちに伝えているかを考え、篠本城の時代を探ってみたいと思う。

1　板碑

板碑とは、故人の冥福を祈る追善供養や生前に自分自身の後生安楽を祈る生前供養のために造られた板石を用いた供養塔である。種子（梵字）、画像、南無阿弥陀仏の名号、南無妙法蓮華経の題目が彫られ、材質や形態等から香取、海上、匝瑳、印旛方面に多い下総板碑と東葛方面に多い武蔵板碑に区別されている。

下総板碑の特徴として、黒雲母片岩（筑波山系）・白亜紀砂岩（銚子石）・凝灰質泥岩（飯岡石）を材石とし、武蔵板碑の頭部山形、二条線の彫り込みという形態に近いもの或いは方形のままで二条線の簡単な線彫りや枠取りだけの形態をもつことがあげられる。

篠本城跡から出土した板碑は、飯岡石を使用した下総板碑である。黒雲母片岩の断片も出土しているが板碑としての形態を止めていない。出土した板碑は、次の二種類に分類することができる。（図１）

⑴飯岡石の形態をそのまま使用したもの

阿弥陀如来種子或いは勢至菩薩種子を主体とし、天蓋、蓮座、一線枠取を有する。

⑵飯岡石を使用して武蔵板碑の形態に近いもの

きちんと整形されているが主体となる種子等が無い。類似の物が山武郡松尾町古和のコクゾウ山にある。

県内最古といわれる小見川町、佐原市所在の「正元元年（1259）」板碑は、武蔵板碑の特徴を備えており、その後、方形のままの整形の少ないものへと移行していくことから武蔵板碑を祖型としていることが既に先学により指摘されている。篠本城跡から出土した飯岡石の板碑も武蔵板碑の特徴に近づようとする意図がみられることから、飯岡石を使用した初期の形態を伝えるものと言っても過言ではない。

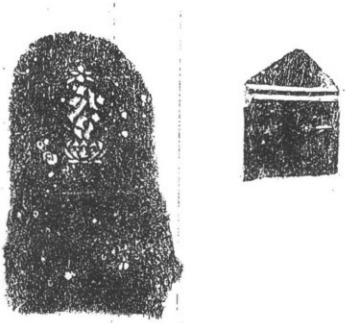


図１　出土した板碑

2　五輪塔

五輪塔は、平安時代末期から造立され、鎌倉時代に発展した。方形の基台・球形の塔身・方錘形の笠・半球形・宝珠形から成り、地、水、火、風、空の五大が万物を構成する要素であることからこれを象徴的に形となしたものである。

真言宗から発して他の宗派にも取り上げられて、供養塔あるいは墳墓標識として造立された。

篠本城から出土したものは、飯岡石を用材としている。水輪のみとか、火輪と水輪のみといった状態で出土していることが多い。（図２）

3　宝篋印塔　（ほうきょういんとう）

宝篋印塔は、鎌倉時代に盛んに造立されるようになった。その形態は、基礎・塔身・笠・相輪の四部から成り、笠に隅飾と呼ぶ突起を立てている。名称は、祖形の金属小塔が宝篋印陀羅尼経の容器であったことから、鎌倉後期になって通称されたと見られている。

篠本城から出土したものは、飯岡石を用材としていて基礎部分が無い。（図２）

図２　五輪塔と宝篋印塔

4　篠本城の信仰

篠本城跡には墓地群があり、火葬の痕跡もみられます。しかし、これまで観てきた仏教遺物は、墓地群に全て存在していませんから、墳墓標識としてというよりも追善供養のために造られたものと見るべきでしょう。

遺物に紀年銘がありませんからいつの時代の物か断定できません。特に、下総板碑の流行からみると、最盛期は、第１次が1340年代から1360年代ごろ、第２次が1480年代ごろ、第３次が1580年代ごろです。この時代背景には、建長６年(1254)ごろ、浄土宗鎮西派の記主上人然阿良忠が匝瑳郡福岡において椎名胤光の援助により「観経疏」の講義行い、鎌倉の称名寺の末寺である多古町土橋の東禅寺に僧の往来が盛んであったことから、浄土教思想の伝播が下総にもあったこと。また、建武２年(1335)千田荘を舞台に千葉介貞胤と千葉大隅守胤貞との抗争によりこの地方が戦乱の中にあった影響の現れであること。さらに、永享12年(1440)の結城合戦への下総・上総の兵の参加があり、千葉一族間の戦による世情の混乱が続き人々が来世への願いを込めた現れであることが挙げられる。

町内寺院は鎌倉・室町時代を開基とするものが多い。篠本城の周辺の寺院では、篠本・新善光寺の鎌倉時代の阿弥陀三尊立像、小川台・隆台寺の室町時代の阿弥陀三尊立像、宝来・阿弥陀堂にある鎌倉時代の阿弥陀如来立像、虫生・広済寺に伝承されている鬼来迎と貴重な文化財が現存している。これらは、浄土教思想の「地獄は必定」という宗教観の中から村民への唱導が行われていた現れである。

栗山川水系の中世城館跡について
――南北朝・室町期を中心に――

遠山成一

1．はじめに

大栄町桜田付近に源を発し、横芝町屋形で太平洋に注ぐ（1）栗山川流域には、支流の高谷川をふくめ、多くの中世城館跡の分布が見られる。とくに多古町で支流の借当川、多古橋川などが合流する付近には、盆地を取り巻く台地縁辺部に城館の分布が顕著である。そして、一帯は中世の千田庄であり、千葉氏の重要な基盤の一つであった（2）。同川は現在でこそ護岸工事などの河川管理がなされているが、かつては中下流域に多くの沼沢地や流路の蛇行が見られた。

2．歴史的背景　その1　　南北朝期

栗山川を取り巻く中世城館のうち、最初に歴史に登場するのは、鎌倉時代末期から南北朝初期にかけての千田庄の城館である。惣領争いから北朝方と南朝方に分かれた千葉氏は、配下の在地武士を巻き込んで、千田庄で合戦を繰り返した（3）。この一連の争いの中で、『金沢文庫文書』の書状により、並木城、大島城、土橋城、大原城、岩部城などの存在が確認される。とくに土橋城（多古町御所台）については合戦がおこなわれ、「責落」とされ12人の城兵が討ち死にしたことを伝えている。また並木城（多古町南並木）に関しても「並木の城」として登場し、「並木のふけ（湿田か）」で合戦があったことがわかる（4）。

さて、ここで大変注目すべきは、「侍所竹元三郎左衛門尉」という人物が「湛睿書状」に登場することである（『金沢文庫文書』）（5）。「竹元」は「ささもと」と読み、篠本を指すと考えてよい（6）。「侍所」とは、千葉氏の被官を統率する機関として置かれていたのであろうか、重要な地位であると考えられる。これに「竹元（篠本）氏」が就いており、軍勢をあつめるなど「侍所」に相応しい働きをしているのである（7）。

また竹元氏は、南北朝期の貞和2年（1346）に、「五郎左衛門尉」が香取社造営の山口祭の沙汰を命じられており（8）、官途名「左衛門尉」を同じくすることから同族とみなすことができよう。竹元（篠本）氏の千葉氏家臣団内での高い位置づけを窺うことができる。当然のことながら、この竹元氏と篠本城の築城主体との関連が問題となってこよう。発掘の成果からは、同城跡の築城年代は「室町時代の中期、15世紀初め」（『ささもとのじょうやま』第7号　1995年5月）とされるので、篠本城跡と鎌倉期から南北朝期にかけての「竹元氏」との関係は、直接はないといえる。鎌倉・南北朝期の竹元氏は、館を構えていたものと推測される。問題は、この竹元氏の系統が後に、室町中期に篠本城を築いたのか否かである。

これに関連して、「香取造営料足納帳」（「旧大祢宜家文書」『香取文書纂』）（9）に「竹元六郎殿分　竹元」と記載されている。「納帳」は応永17年(1410)頃に作成されたものと考えられるが、ここに登場する竹元六郎は、まさに篠本城の築城年代である「室町時代の中期、15世紀初め」に該当する人物と言える。しかし、ここではこの人物が城主だと即断は避け、慎重に検討をしたい。なお、「納帳」に記載されている人物は、千葉氏の被官ともいえる者ばかりである。それゆえ、鎌

倉末から南北朝にかけて「千葉侍所」を務めた竹元氏と同系である可能性は高い。

この他、城館跡とは直接の関連はないが、千田庄に円城寺氏が本拠を構えていたことを指摘したい（10）。『金沢文庫古文書』にも登場する円城寺図書左衛門尉（11）と、同右衛門尉（沙弥蓮一）は両者の関係は不明であるが、ともに千田庄に本拠を有すると考えられる（12）。

以上のように鎌倉期から南北朝期にかけての栗山川水系の城館は、千田庄をめぐる争いの中で歴史に登場した。そして、この中で、千葉氏の家臣としては高い地位を占める、竹元氏の存在が明らかになった。また、千葉氏の重臣円城寺氏も、千田庄内に本拠を有することが確認された。

3．同　その2　　室町期

15世紀中葉の享徳の大乱に絡み、千葉氏の内紛が生じるが、本宗家の胤直、宣胤父子の落ち延びた先は、千田庄の多古城、島城（13）である。ここで馬加康胤、原胤房は本宗家を滅ぼし、馬加氏が千葉介を奪取した（多古島合戦）。『鎌倉大草紙』によると、胤直は島城より土橋の東漸寺へ逃げ、一族家臣とともに自刃したことになっている。これについて、筆者はかつて『本土寺過去帳』の分析から再検討の要があることを指摘した（14）。しかし、いずれにしても、島城（多古町島）から土橋まで逃げたという『大草紙』の記事は、両者の水運による連絡（15）の事実を物語っていよう。

また、なぜ千葉胤直らは逃亡先に千田庄を選んだのかであるが、千葉氏の内紛自体、原氏と円城寺氏との対立がその原因とみなされており、円城寺氏の本拠の同庄をたよったことがその一つにあげられよう。ところで、15世紀中葉といえば、まさに篠本城跡の使用年代の最中である。この多古・島合戦では、同城に拠った人物がいかなる行動をとったのか。さらには、鎌倉から南北朝にかけての「竹元氏」と、同城の関係の有無が問題である。

いままでの発掘の成果からは、築城主体は「恐らく平等な立場の国人層」と推定されているが（前掲『ささもとのじょうやま』）、千葉介の侍所を務めるような力を持った一族、竹元氏との関連も、一つの可能性として検討の余地はあろうかと思われる。

また、多古・島合戦時の同城の動向については不明であるが、多古盆地に直接面しておらず、むしろ使用されたとしたら、多古・島両城を望める要害台城跡の方であろう。同合戦では、栗山川を臨む台地縁辺部にある城郭が、南北朝初期から時を経て、再び取り立てられて使用された（16）可能性があろう。

4．栗山川流域の中世城館跡の分布について　―　まとめにかえて

時代区分を無視して言えば、栗山川（特に多古盆地）および支流高谷川の城館跡の分布は密である。栗山川については、その歴史的経緯を見てきた。また高谷川流域に関しては、先に拙稿において（17）、戦国後期の千葉胤富の家臣（山室・井田・和田氏）が、城郭を線でつないで防衛ラインを形成した、と結論づけた。そして、篠本城跡の位置する光町北部域は、戦国期に下ると思われる小城館跡が密に分布している。

このことは、高谷川流域の城館分布と篠本城跡近辺のそれとが、異なった環境のもとでそれぞれ形成されてきたことを意味していよう。つまり、前者よりも後者の築城主体の方が、勢力的に弱小ということである。そのことは、城郭の縄張（18）にも表れているように思われる。

しかし、篠本城跡の縄張に関しては複郭であり、しかも曲輪間の序列が見られないことから、先に述べたごとく「平等な立場の国人層」の築城が推定されている。また、戦国後期まで使用されていないことも、同城跡周辺の城館跡群の中では特異な存在である。

註

（1）近世以前の河口は現位置ではなく、木戸川寄りの南方（一時は木戸川と合流）だったという（『角川地名大辞典　千葉』）。

（2）後掲の「香取造営料足納帳」をみても、千葉庄・印東庄と並んで、応永期の千葉氏の基盤のひとつに考えられる。この点は拙稿「室町前期における下総千葉氏の権力構造についての一考察」（『千葉史学』16号　1990）を参照されたい。

（3）小笠原長和「建武期の千葉氏と下総千田庄」（『中世房総の政治と社会』1985）。

（4）「湛睿書状」『金沢』（『千葉縣史料　縣外文書』718号）に「土橋城御警固之由」とある「悟円書状」『金沢』（『縣外』384号）。なお、『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書　－旧下総国地域－』（千葉県教育委員会　1995）において、外山信司氏が土橋城跡について、報告されている。並木城跡の現在見ることのできる遺構は、戦国期のものである。

（5）「湛睿書状」（『金沢文庫古文書』　　号）。千野原靖方『千葉氏　鎌倉・南北朝編』崙書房　1995

（6）「親真書状」『金沢』（『縣外』705号）に「竹元…サヽ下ノ新左衛門」とあり、「ささもと」と読めることがわかる。

（7）「某書状断簡」『金沢』（『縣外』748号）。「…竹元も去月廿一日大原へ付候て国中軍勢を集候…」とある。竹元氏が侍所に就くなど、千葉家において重要な役割を果たしていたことがわかる。

また「建武元年九月三日付沙弥蓮一奉書」（『田所家所蔵文書』『香取文書纂』）には、「私云」で始まる傍書がある。この部分に関しては、おそらく田所家に伝来する過程で、同家の人物が記録として書き止めたものと考えられるが、その終わりに「一海上竹本殿子息 太郎歟在京之間親父之許へ被取下記録壁ノ書案云々」と出てくる。「海上竹本殿」とは、海上氏の一族で竹本（篠本）－現銚子市笹本町－を称した系統を指す、と考えられる。海上の竹本氏と千田庄の争乱に登場する侍所竹元氏とは、別系統とみておきたい。

（8）「山口祭之事」『香取大祢宜家蔵一』（『香取文書纂』）。貞胤より竹元五郎左衛門尉が香取社造営の山口祭の沙汰を命じられている。山口祭とは、香取社造営のための木材を伐採する時の祭であり、造営の最初の重要な儀式である。

（9）註（2）の拙稿を執筆した時点では、竹元氏および竹元については不明としていた。

（10）拙稿「円城寺氏について」（『中世房総の権力と社会』1991　高科書店）を参照のこと。

（11）「湛睿書状」『金沢』（『縣外』719号）に「図書左衛門」とあり、円城寺氏と考えられている（註3小笠原論文）。また、多古町妙光寺の日蓮座像胎内銘に載る「大檀那円城寺図書左衛門尉源胤朝」と、『中山法華経寺文書』中の「図書左衛門尉源胤朝奉書案」は同一人物か。このことについては、前註の拙稿を参照のこと。

（12）蓮一については、『金沢文庫古文書』にいくつかの史料が見受けられる（2350～2352号）ほ

か、『香取文書纂』（註７）にも関連史料が載る。福島金治氏は蓮一を「千田荘の領主・千葉氏の一族の一人」で「東漸寺の檀越の一人」（特別展図録「鎌倉への海の道」1992）と推定されている。また山田邦明氏から、「田所文書」を根拠に、蓮一が円城寺右衛門入道と同一人物であることを筆者は指摘をうけた。その後、千野原氏は『千葉氏　鎌倉・南北朝編』でこれを明確にされた。これらを総合的に判断すると、蓮一は千田庄に根拠を有する守護代クラスの有力領主であった、と思われる。

(13) 多古城跡に関しては、最近畝堀が発掘されるなど、戦国後期まで使用されていたことが明らかになった。しかし、島城跡については、文字通り沼沢地に浮かぶ「島」のごとく、天然の要害として人工を加えておらず、戦国期以前の所産と思われる。なお、両者についての詳述は、小高春雄「城郭史におけるひとつの画期－史料にみる地域の例から－」（『千葉城郭研究』第２号　1992）にゆずる。

(14) 外山信司・遠山成一「岩富原氏の研究」『房総史学』第26号　1986

(15) 同じく「岩富原氏の研究」で、千葉胤直の弟賢胤が「ヲツヽミ」（横芝町小堤）で自害したことを指摘したが、小堤は栗山川の中流域で高谷川との合流点を臨む地にある。おそらく、賢胤は船で島城を脱出した、と思われる。

(16) 最近の中世城郭研究において、館の背後の山に城を築き、それを恒常的に維持するのは、15世紀中頃以降ということが明らかにされてきた。斉藤慎一「本拠の展開」『中世の城と考古学』（石井進・萩原三雄編　1991）

(17) 拙稿「両総国境に分布する城館跡について」『千葉城郭研究』第３号　1994年

(18) 前注でも触れたが、前者は直線連郭を主体とするのに対し、後者の多くは単郭か二つの郭をもつような小城郭が主体である。近刊の前掲『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ』では、寒風城跡、岩室砦跡、古城跡の三箇所が縄張図を掲げて解説されている。この中で、寒風城跡は直線連郭状に三つの曲輪が並び、三重土塁や竪堀をもち、後者では異質なものといえる。

発表者紹介

小野正敏
（国立歴史民俗博物館）
伊藤一男
（九十九里総合文化研究所）
柴田龍司
（香取郡市文化財センター）
橋浦芳朗
（光町宮川放光院）
椎名幸一
（千葉城郭研究会）
道澤　明
（東総文化財センター）
司会 遠山成一
（千葉県立佐倉東高等学校）

シンポジウム
よみがえる篠本城跡
――戦国動乱期城郭の謎にせまる――
（篠本城に見る房総の中世）

発行日　平成7年10月14日
編集発行　財団法人東総文化財センター
千葉県匝瑳郡光町宮川字宮内前2334
電話　0479(84)3368
印刷　秀英社
電話 0479(22)8900